

V 研究奨励校・研究指定校における研究実践

1 学力向上事業に関わる研究奨励校

(1) 室蘭市立八丁平小学校

【研究主題】 『豊かな学びをする子の育成』
～確かな学力の定着を目指した、授業力の向上～

(2) 室蘭市立本輪西小学校

【研究主題】
『生き生きと活動に取り組み、思いを表現できる子どもの育成』
～言語活動を重視した授業を通して～

(3) 室蘭市立翔陽中学校

【研究主題】 『確かな学力を身に付ける生徒の育成』
～教科における考える力を高める指導の工夫を通して～

2 パイロットスクール事業に関わる研究指定校

(1) 室蘭市立絵鞆小学校

【研究主題】
『豊かに伝え合う力を身に付け 自ら高める子の育成』
～国語科における話す・聞く・書くの基礎基本を身につけ
表現力を高める授業改善を通して～

(2) 室蘭市立桜が丘小学校

【研究主題】 『伝え合う力を高め、豊かにかかわる子の育成』
～「読むこと」を軸としながら、国語への理解力・表現力をはぐくむ～

(3) 室蘭市立東明中学校

【研究主題】 『確かな学力の向上をめざして』
～基礎・基本的な内容の習熟、定着を図る授業の工夫～

I 研究主題

豊かな学びをする子の育成

～確かな学力の定着を目指した、授業力の向上～

II 主題設定の理由

21世紀は、「知識基盤社会」の時代といわれている。この「知識基盤社会」を生き抜いていくために必要な主要能力が、新学習指導要領の理念である「生きる力」である。生きる力を支える「確かな学力」を身に付けさせることが必要である。

また、八丁平小学校の学校目標は、「自分で考え、進んで勉強する子（知）」、「思いやりの心を持ち、助け合う子（徳）」、「明るく元気で、たくましい子（体）」である。

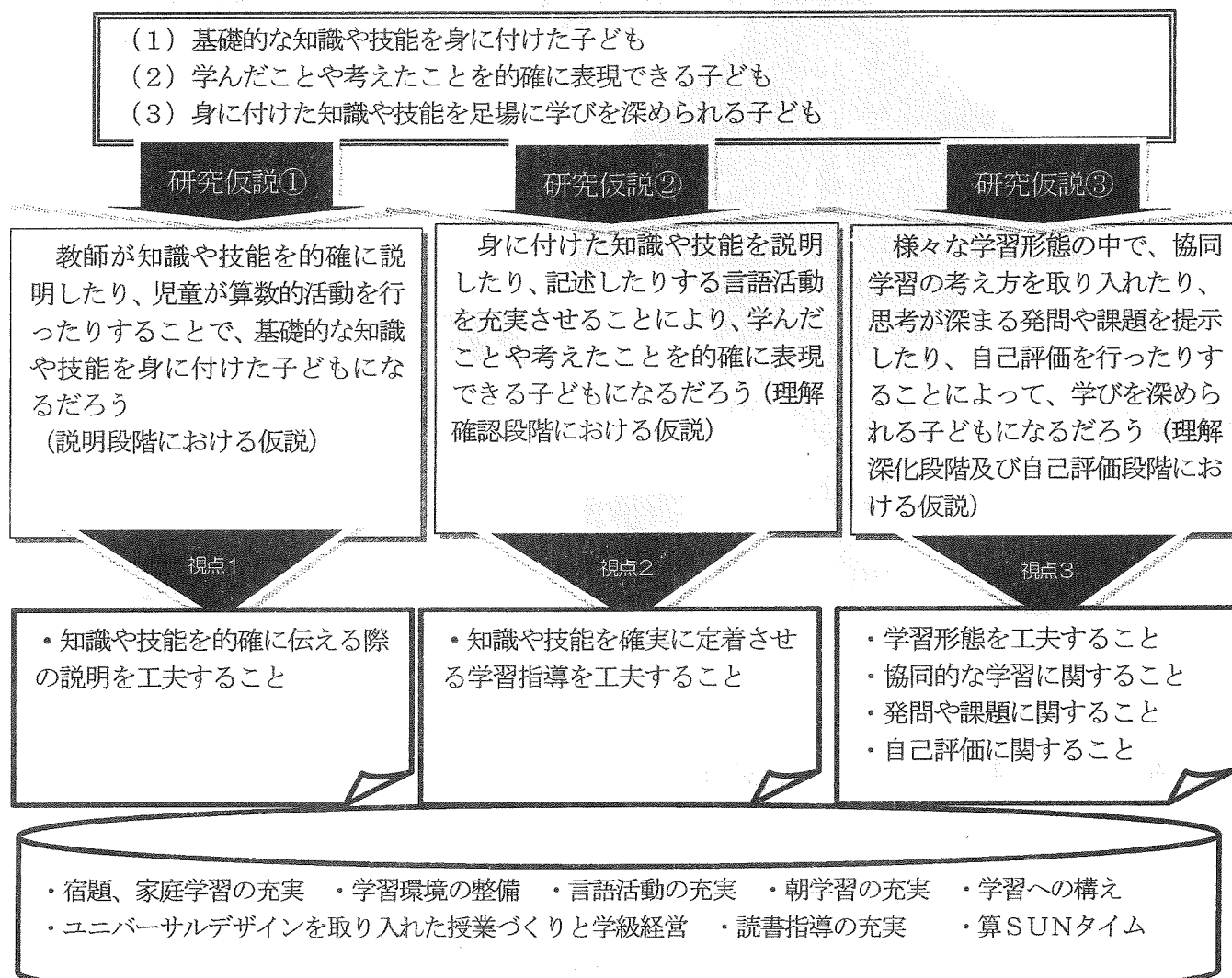
「進んで勉強する子」は、まさに「豊かに学ぶ子」である。

そして、学校長の学校経営方針の中で、「授業力を高めることは最大の使命である。」とある。

子どもたちに確かな学力を身に付けさせるためには、我々の授業力の向上が不可欠である。

以上の理由から研究主題を設定した。

研究主題で目指す「豊かな学びをする子」をさらに具現化したもの、及びそれぞれの研究仮説やその視点は以下の通りである。



III 研究内容

(1) 研究の柱 「教えて考えさせる授業」に関わること

研究主題にある「豊かな学びをする子の育成」を達成するためには、「教師の授業力」を高めなければならない。本校では、授業力を「児童に確かな力を身に付けさせるための力」と定義している。その授業力として、「教えて考えさせる授業」を柱とした。

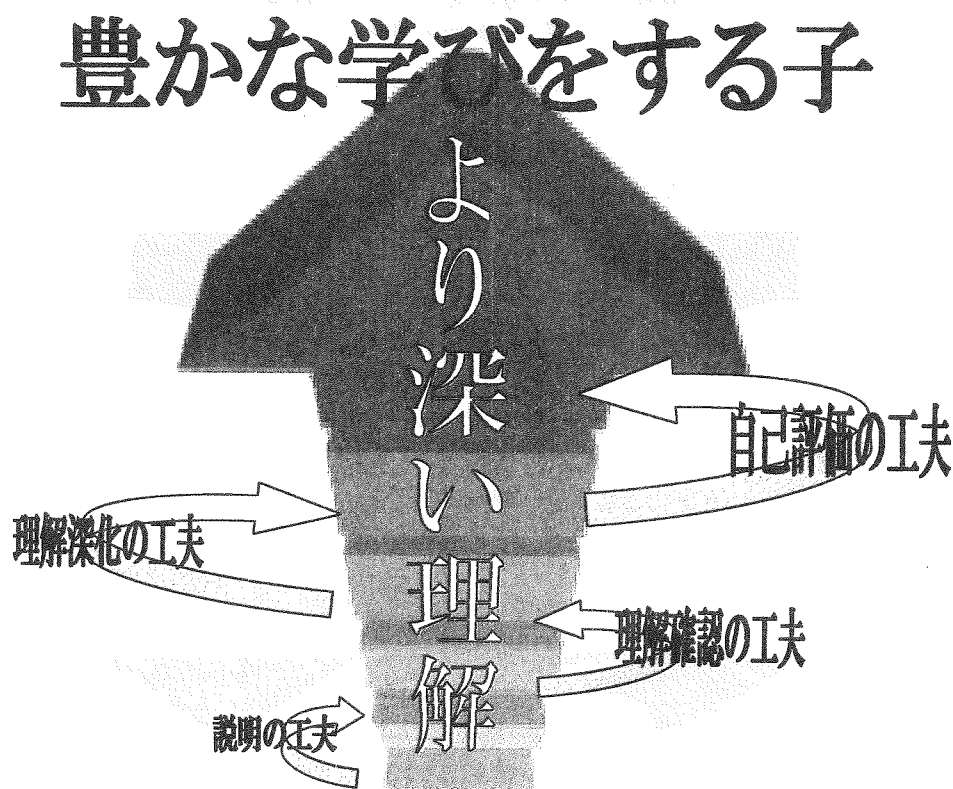
「教えて考えさせる授業」とは、東京大学大学院教育学研究科の市川伸一教授が提唱しているものである。

子どもに考えさせるために、教師が必要な知識や技能をしっかりと教え、子どもたちの理解を確認し、考えさせるための足場を作る。定着した知識や技能を足場に発展的な問題や課題等に取り組ませることで、より深い理解を目指すのが、「教えて考えさせる授業」である。

指導過程の原則として①教師からの説明、②理解確認、③理解深化、④自己評価という授業の流れを基本としている。イメージは下図である。

①の教師からの説明では、新しい知識をしっかりと教えることから始まる。教えると言っても一方的な説明ではわかりにくい。教材や教具を工夫したり、操作活動を行ったり、作業によって体感させたり、子どもとのやり取りで説明するなど、わかりやすく教えていくことが大切である。

②の理解確認では、教えたことが理解できているかを子ども同士の説明活動や教え合い活動で確認する。



口頭や記述で説明できるか、類似問題が解けるかどうかなどで理解を確認する。

③の理解深化課題では、子どもが誤解していそうな問題や、教えられたことを使って考えさせる発展的な課題を行い、さらに理解を深める。

④の自己評価活動では、授業でわかったこと、まだわからないことを記述させたりすることで、子どものメタ認知を促すとともに、教師が授業をどう展開していくかを考えるのに活用できる。

なお、本校では、我々教師がいつでも「教えて考えさせる授業」を日常的に授業に生かせるように次のページのようにまとめた。

教えて考えさせる授業のイメージ

<「教えて考えさせる授業」八丁平小学校バージョン>

指導過程		概要
教 え る	予習 確認	・教科書を読んでおく。問題を解いてみる。わからないところに付箋を貼る。 ・本時の目標達成のために必要な知識・技能を確認するために、問いかけたりフラッシュカードなどを用いたりする。
	説明	<u>「考えさせる」ために必要な知識・技能を教える。</u> ○具体物や映像（アニメーション）を見せる。 ○いろいろな例をあげて説明する。 ○比喩を使って説明する。 ○操作活動を取り入れる。 ○作業させる。 ○比較させる。 ○教科書を音読する。 教師主導であっても、子どもとの対話や、挙手発言を通して教えることが重要である。
考 え さ せ る	理解 確認	<u>「理解深化」のための足場を固める。</u> ○類似問題。 ○数値のみを変えた問題。 ○教科書の練習問題。 ○教師が説明したことを、ペアなどで説明し合う。
	理解 深化	<u>ジャンプの課題・考えがいのある問題を提示する。</u> ○間違い探しや穴あき問題。 ○児童による問題作り。 ○誤答修正問題。 ○誤答しそうな問題。 ○教科書などの発展問題。学力テストB問題。 ○小グループなどでの協同解決、討論。 ○試行錯誤によりコツを体得させる。 学習形態の工夫により学びが深まるが、目標や目的を明確にする必要がある。
	自己 評価	<u>より深い理解を目指すと共にメタ認知力を付ける。</u> ○分かったこと、分からなかったこと、大切だと思ったことを書く。 ○チェックリストへの記入や挙手による振り返りを行う。 ○個人で問題を解く。

(2) 研究内容①（研究仮説①に関わること＝説明段階）

視点1 知識や技能を的確に伝える際の説明を工夫すること

子どもに身に付けさせたい知識や技能をわかりやすく教師主導で教える。一方的な説明ではなく、具体物やICT、対話的な説明、算数的活動を通して、丁寧にわかりやすく知識や技能を伝えていくことが大切である。

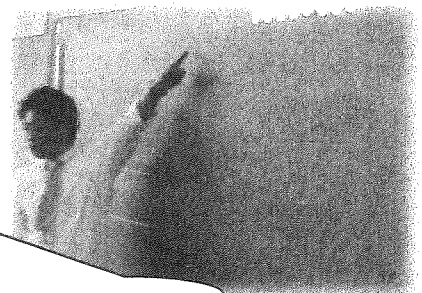
本校の指導案で、「教える場面」と「考えさせる場面（理解確認・理解深化・自己評価）」を明記し、教師自身が意識できるようにした。

（4年算数科 「2けたでわるわり算の筆算」 実践例）

	学習活動	備考（○留意点 ◎評価 ※形態）
教 え る	1 前時の学習を振り返る。	
	6 $80 \div 20$ の計算の仕方を説明する。 ・2けた÷2けただ。・あまりは出なさそう。 ・10をもとにすると、 $8 \div 2$ になる。	○10円玉の模型を使って、児童とのやり取りを大切にしながら、説明する。

教える場面と考えさせる場面を指導案に明記することで、指導者自身も過程を意識できた。

具体物を使い、視覚的にもわかりやすく説明する。一方的な説明ではなく、温かなやりとりを大切にする。



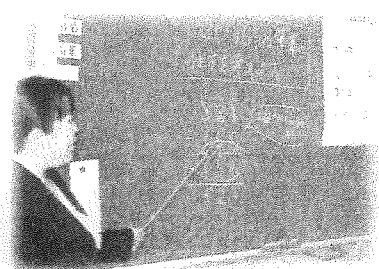
(2) 研究内容② (研究仮説②に関わること＝理解確認段階)

視点1 知識や技能を確実に定着させる学習指導を工夫すること

教師による説明だけでは、「わかったつもり」「生わかり」の状態である。基礎的な知識や技能をより確実に習得させるためには、それらの知識や技能を「行為化」させなければならない。行為化することで知識・技能が向上する。ここで言う行為化とは、類似問題に取り組んだり、説明するなどの言語活動を行ったり、作業をしたりする算数的活動を行うことである。

理解確認段階では、理解深化問題・課題に取り組む上での足場を作ることを目的とする。

(3年算数科 「たし算とひき算の筆算」 実践例)



筆算の仕方を説明する。
(説明段階)



全体で筆算の仕方を確認する。
(理解段階)



ペアで筆算の仕方を確認し、理解深化問題の足場を作る。
(理解段階)

(3) 研究内容③ (研究仮説③に関わること＝理解深化及び自己評価段階)

視点1 発問や課題を工夫すること

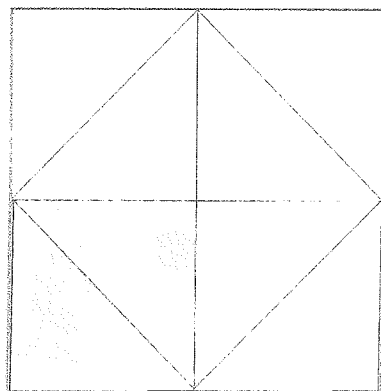
身に付けた知識や技能を足場に理解深化問題や課題に取り組ませる。ここで提示する問題や課題は、誤答修正問題、誤答しそうな問題、足場を基にして考える発展的な問題・課題、試行錯誤によるさらなる技能の獲得などが考えられる。「考えがいのある問題や課題」「ジャンプの課題」になることが重要である。

理解深化問題や課題を通して、「生わかり」の状態から「本わかり」となる。「習得から活用」という一方的な流れではなく、習得から活用、活用から習得、そして再び活用へと絶えず連続的に繰り返され、「基礎に降りていく学び」を意識していく。

(2年算数科 「三角形と四角形」 実践例)

考
え
さ
せ
る
理
解
深
化

○理解深化問題を行う。
(チャレンジ) 次の図の中に直角三角形は何個ありますか？



○1つのかどが直角になっている三角形が直角三角形であることに着目させ、いくつあるかを考えさせる。【研究内容③に関わって】

説明段階では、直角三角形の定義を理解した。

そして、理解確認段階では、直角三角形かどうか判別する問題を行い、理解深化問題の足場を作った。

その足場をもとに、考えたえのある問題を行った。ハイレベルの問題を考えることにより、基本的な知識や技能が一層定着するとともに、活用能力が身に付くことを理解深化段階では目指している。

視点2 学習形態を工夫すること

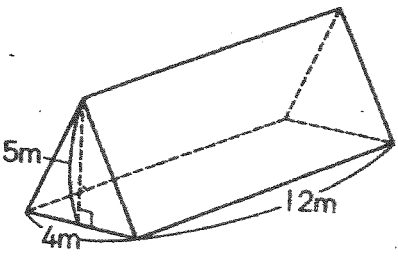
理解深化段階や理解確認段階では、学習形態を工夫し、言語活動を充実させることで学びが深まっていく。全員の学びの保障にもつながる。

教材の特性や児童の実態などを見極め、個別学習、ペア学習、グループ学習、一斉学習などの学習形態を工夫していく。その際に、学習形態のねらいを明確にすることが大切である。なぜその学習形態なのか？を指導者は意識して授業を展開していく。

グループ学習のための活動にならないようにすることが大切である。あくまでも、全員が深い学びになるために行わなければならない。

(6年算数科 「立体の体積」 実践例)

考 え さ せ る	理 解 深 化	○理解深化問題を行う。	○個人で取り組む→ペアで交流→グループの中で説明する。 (※グループ学習)【研究内容③に関わって】
		A $(4 \times 5 \div 2) \times 12 = 120$ 120 m^3	



ねらいのない学習形態の工夫は無意味である。

まずは個人で考え、ペアで交流し、グループの中で説明するという流れで学習を展開した。

その後、学級全体でも児童が自分の考えを説明する時間も保証した。

学習形態のねらいを意識した学習展開を行うことにより、深い学びになることを目指している。

視点3 協同学習を取り入れること

協同学習について、ジョンソン・ホルベックは次のように定義している。「協同学習とは、小集団を活用した教育方法であり、そこでは生徒達が一緒に取り組むことによって自分の学習と互いの学習を最大限に高めようとするものである。しかし、ただグループに分けて学習させるだけでは、協同学習とは言わない。学習者を小集団に分け、その集団内の互惠的な相互依存関係を基に、協同的な学習活動を生起させる技法が協同学習である。」とある。

また、杉江修治氏は『協同学習入門』の中で、「学力を効果的に身に付けさせていくための“基本的な考え方”である。そして、グループ学習が協同学習ではない。協同学習は教育の基本的な考え方を体系的に示す教育論理であり、教育の原理である。」と論じている。

教育原理であるうえ、共通理解は可能だが、共通の方法を推進していくのには、なかなか難しい。

そこで本校では協同学習が充実しているかどうかを、以下の条件で確認し、展開していく。

協同学習 5つの基本的要素

- ①活動がお互いのためになっているか？(促進的相互依存関係)
- ②全員参加か？(対面的な相互作用)
- ③関わり合いがあるか？(個人の責任)
- ④盛り上がっているか？(対人技能や小集団の運営技能)
- ⑤よりよいものを求めているか？(集団改善手続き)

視点4 自己評価・自己診断を工夫すること

最後の指導過程は、授業で学んだことや大切に思ったことを振り返る活動を行う。振り返りは、原則として個人で行う。

授業の最終目的は、個人による習得・活用である。「強い個人」を作ることである。その最終目的を達成するためには、個人での自己評価・自己診断が必要である。

自己評価・自己診断を行うことによって、メタ認知を促すとともに、より深い学びになっていくことが期待される。

(6年算数科 「立体の体積」 実践例)

① 評

少しまんちょうしたけど最後までし。かり説明でまてよか。た。です。前は、説明はニガテだったけど、少し説明のしかたが、うまくなれたと、思います。

自分の成長を確認し、変容を自覚することでメタ認知を鍛えることができる。今後の課題は、「ねらいに迫る自己評価」となるような指導である。

IV 成果と課題

成果

- 「説明段階で、説明する知識や技能は何か？」を考えることにより、教えるべき知識や技能を意識することができた。
- 理解深化の時間を確保するために、端的に説明する意識がより強くなり、ICTなどの教材教具を工夫し、よりわかりやすく説明できるようになった。
- 教師からのわかりやすい説明により、どの子も授業に安心して参加できている。無駄に混乱することもないので授業自体がスムーズである。
- 理解確認場面で「説明し合う」というペア学習を取り入れることにより、自分の考えを説明できるようになった。

課題

- 説明を短くしようとする、十分に理解できずに授業を進めてしまうことがある。一方で丁寧に説明しすぎて理解深化の時間が確保できないことがある。身に付けさせたい知識や技能を端的かつ確実に説明する工夫を検証する必要がある。(説明段階)
- 理解確認段階では、ペアで説明する場面を活用しているが、数量感を伴わない、意味理解を伴わない説明が見られる。理解を深めるための理解確認段階を検証する必要がある。(理解確認段階)
- 理解深化問題・課題をどのような内容にするのか？どれぐらいのレベルにするのか？適切な理解深化問題・課題を検証する必要がある。(理解深化段階)
- 協同的な学習の共通理解と実践を進めていかなければならない。
- 「教えて考えさせる授業」を意識しすぎて、教材研究が不十分なところがあった。授業スタイルを意識しつつ、「算数科」の教科研究を深める必要がある。
- 「教えて考えさせる授業」は1単位時間の授業スタイルだが、単元を見通して身に付けさせたい力についても検証する必要がある。

室蘭市立本輪西小学校

I 研究主題

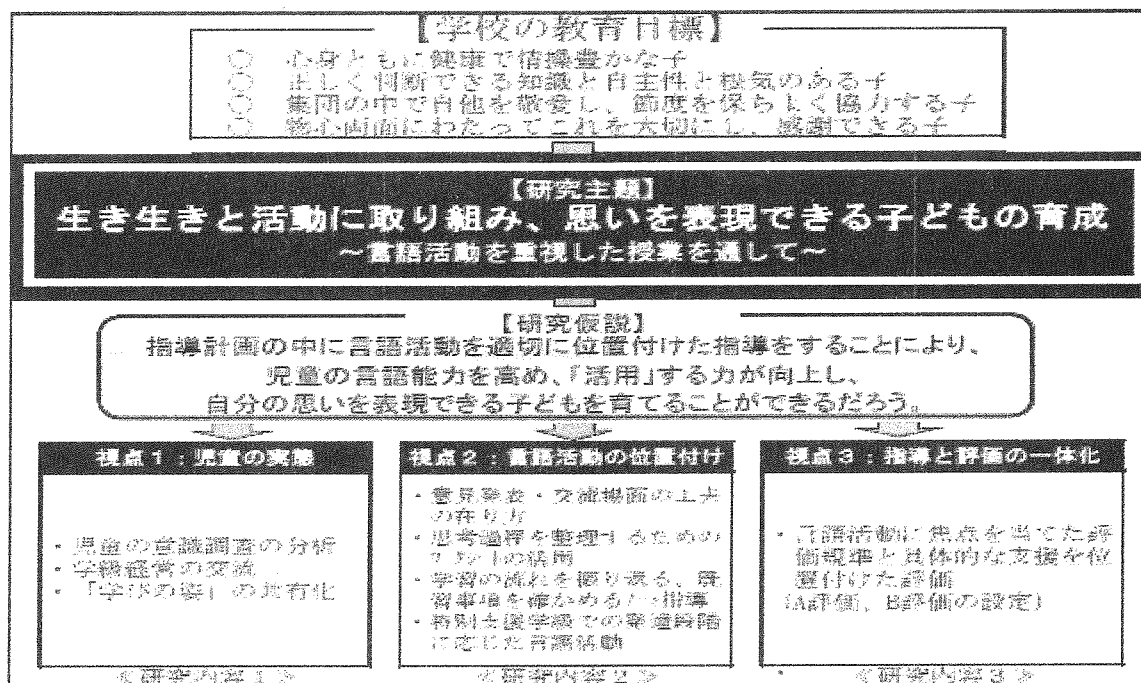
生き生きと活動に取り組み、思いを表現できる子どもの育成
～言語活動を重視した授業を通して～

II 主題設定の理由

本校における教育目標「正しく判断できる知識と自主性と根気のある子」の具現化として、集団生活のルールや学習の基礎・基本を積み重ね、地道に努力することのできる児童の育成を目指した。また、本校独自の取り組みである「児童の意識調査」から、全学年共通して「話す・書く」などの表現活動に対する苦手意識の割合が高く、児童自身が生き生きと活動に取り組む、つまり学ぶ楽しさや喜びを感じることができるようになるためには、一人一人が自分で考え、間違いを恐れずに意見を交わし、共に学び合うことや、自分の経験や知識を基に考えることが必要であると考えた。自分の思いを自信をもって表現するためには、児童の実態や個人差に応じながら、それぞれが集中して取り組んだり、今までと比較してみたりすることで、話すこと・書くことができたという満足感を味わいながら表現する力を身に付けられるよう言語活動を計画的・適切に取り入れること、指導計画や指導方法の工夫改善が必要であると考えた。

そこで、本校では、学習活動そのものが言語活動である国語科に限定し、領域「書くこと」において、ねらいに迫るための言語活動を重視した授業を組み立てることにより、「生き生きと活動に取り組む、思いを表現できる子どもの育成」を目指し、本研究主題を設定した。

III 研究の全体構造



IV 研究の内容

(1) 年間計画

NO	日時	内容
1	5/7(火)	学級経営交流会①→児童の実態交流と学習ルールの共通理解
2	5/20(月)	全体研修→今年度の研修の方向性の確認、学びの姿の共有化
3	6/17(月)	ブロック研修→公開研究会に向けた日程・指導案の形式確認
4	7/22(月)	全体研修→「書くこと(ワークシートの活用やノート指導等)」を重点とした実践交流
5	8/26(月)	学級経営交流会②→1学期の意識調査の結果と分析、児童の変容・今後の課題
6	9/9(月)	ブロック研修→指導案検討
7	9/24(火)	・学級、子どもの実態に応じた指導 ・言語活動の位置づけ ・評価基準の見直し・設定
8	10/28(月)	
9	11/11(月)	全体研修→全体での指導案の確認(言語活動を中心として)
10	11/21(木)	公開研究会
11	11/25(月)	ブロック研修→研究授業の反省
11	12/16(月)	全体研修→3年間のまとめと反省
12	2/17(月)	学級経営交流会③→2学期の意識調査の結果と分析、児童の変容と次年度の課題
14	2/24(月)	全体研修→次年度の研修の方向性について

(2) 視点に関わって

《視点1》

研究主題を追究し、学校の教育目標を達成するためには、児童の実態を把握し、目の前の児童一人一人の姿と成長を見つめることが、大切である。本校では、「児童の意識調査」を実施するとともに、定期的に「学級経営交流会」を開催し、児童一人一人の生活や学習状況を交流するなど、全教職員で児童の実態把握に努めている。

① 意識調査の分析

自分を見つめてみよう！(第 回) 年

ここにちからをきたえていきますか？	ちからをいえます よくしるはうだよ。 読まらな くはないから
1. 好きなことや時間のかかることでも、逃げないで、がんばっていますか？	
2. 休み時間や放課後、グラウンドや山、体育館、一輪車ルーム、ブレイクームで遊んでいますか？	
3. いっぱいがんばって、いっぱいたえていますか？	できいます 得意な方です！
4. 聞いてくれているみんなに、とくで書くことが出来ますか？	得意な方です！
5. いつも「読」や「書」や「読」などききながら、書いたり、聞いたり、やってみたりしていますか？	
6. 自分の思いを、すずんで話すことができますか？	
7. 自分の考えや思いを、文に書くことができますか？	

4分野15項目で構成された独自の意識調査を各学期末に実施し、集計・分析している。

【今年度2学期末の集計・結果】

⑤「自分の思いを進んで話すことができる。」はい…53.4%、いいえ46.5%

⑥「自分の考えや思いを文に書くことができる。」はい…76%、いいえ…23.9%

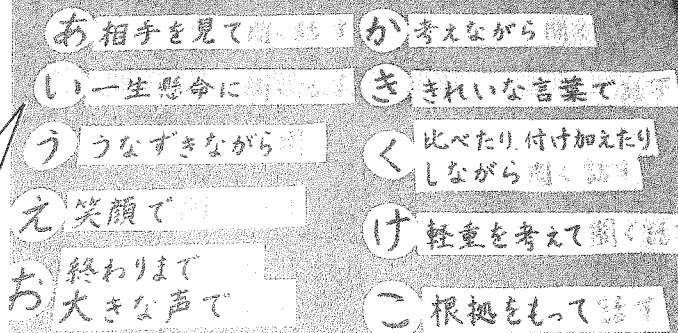
② 学級経営

③ 学びの姿の共有化

学習ルールとして、全学級で掲示。

各発達段階に分けながらも、系統性をもつ日常的な取り組みとして掲示している。

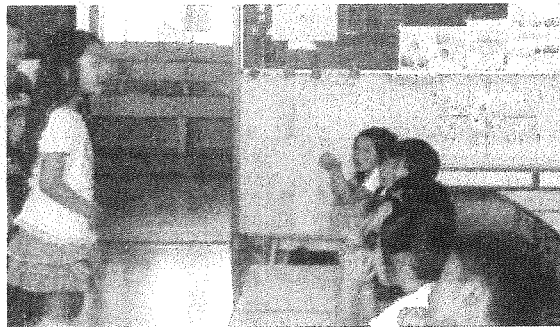
- ・低学年…あ～お
- ・中学年…あ～き
- ・高学年…あ～こ



《視点2》

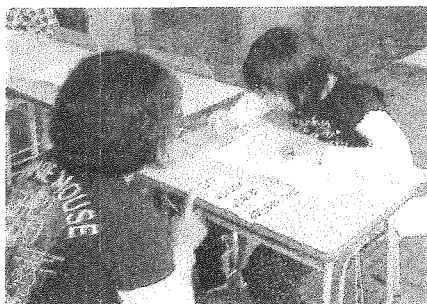
本校では、児童が自分の考えや思いを相手に伝えるための表現の技能を身に付けられるよう、単元の指導計画や本時の展開の中で、「言語活動」を位置づける場面を工夫し、「活用」する力を高めることができるよう、児童に身に付けさせたい言語能力を明確にし、場面に応じた適切な表現を指導するなど、具体的な手立てを講じている。

① 意見発表・意見交流場面の工夫の在り方



自分の思ったことを、まとめる。整理する。

絵や図・記号や単語をつなげて、できた・分かったところまでを、自分の言葉で伝えようとする気持ちを高める。



・何を話しているのか？
・どんなことを考えたのか？
・自分と同じなのか？
違うのか？

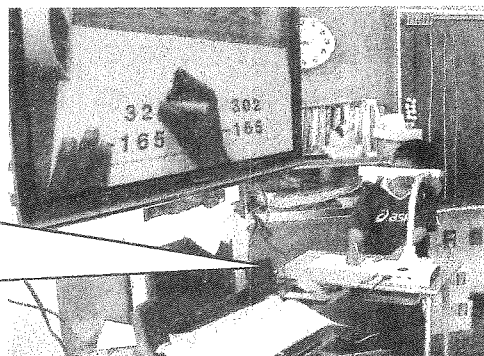
自分の考えをもつことで、「皆はどう考えたのかな？」「自分と同じかな？」「聞いてみたい。話してみたい。」と、学びが広がったり深まったりすることにつながると考える。故に、一人一人が自分の考えをもつことができるような活動の展開や支援を行った。

自分の考えがもてない時には、友だちを真似たり参考にしたりしながら自分の考えとしてまとめ、話したり書き表したり伝え合う中で互いに聴き合い、自分の考えを振り返ったり、友だちとの考え方の違いに気がついたりするよう取り組んでいる。

個々での取り組みから、相手を意識したペアでの交流（確かめ・助け合いを含む）、少人数での交流、そして全体でのまとめや振り返りなどの言語活動のあり方を工夫した授業の実践に取り組んだ。

- ・実物投影機
- ・デジタル教科書
- ・電子黒板

等で集中を促し、理解や表現の手助けとする。



② 思考過程を整理するためのワークシートの活用

個々の感想を付箋に書き、交流。
書き方（表記・文章構成）に対しての感想だったり、内容（自分の考えとの比較）に対しての感想だったり、目標に応じた交流を行う。

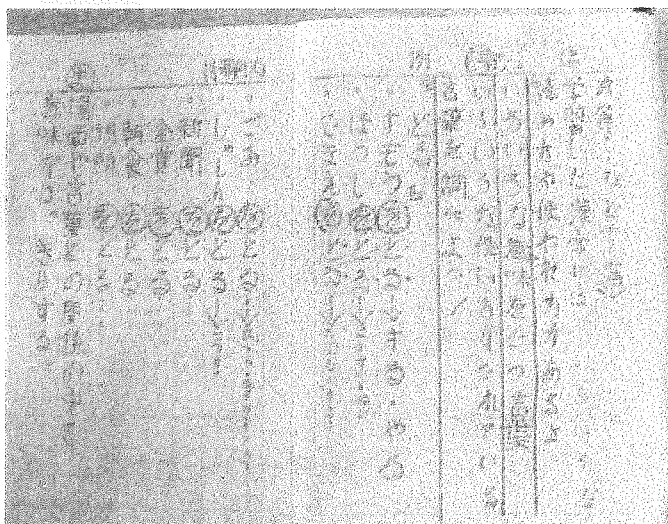
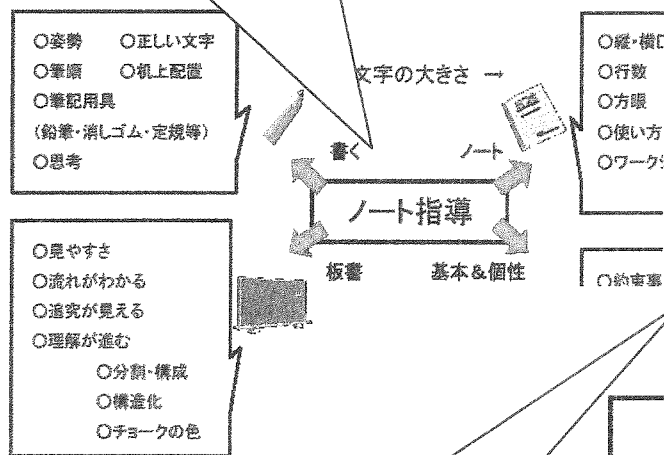
交流で深めた学びや新しい考え、「これでいいんだ。」という自信を、まとめる（修正したり付け足したりしながら書き表す）ことで、思考がより整理される。

5年 国語科「作文名人になろう」↑

4年 国語科「いろいろな意味をもつ言葉」↓

③ ノート指導

日々の学習を振り返る、既習事項を確かめるなど、学習の積み重ねとしてノート指導に取り組んだ。



ノート指導にかかわって(本輪西小学校の取組)

- ① ノートには、日付を書く。
- ② 単元の始まりには、単元名・教材名、国語の場合は作者を書く。
- ③ 課題(めあて)を板書する際は赤チョークで囲む。児童も赤鉛筆で囲む。
- ④ 学習用語やキーワード(重要語句)については、黄チョークで板書し、児童は赤鉛筆で記述する。
- ⑤ 学習の終りには、分かったことをまとめたり、自己評価(◎・○・△・×)を行う。

- ・ マス目を指定している場合は、板書もマス目に合わせた字数で書くようにしたい。
- ・ 児童の事柄や進級に合わせて、板書以外(友だちの考えや先生の語ったことなど)もメモし、見やすくまとめていくことができるよう、赤色以外にも活用していきたい。
- ・ ワークシートを活用した際は、ノートに添付するか、ファイル等にまとめておきたい。

担任が変わっても、ノートの取り方は大きく変わらないという本校の基本スタンスを作り、進級と共に整理・追究・理解が進むようなオリジナルリティあふれるノートを作成できるよう指導している。

83

《視点3》

児童一人一人が基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得し、それを活用するためには、年間や単元(題材)の指導計画の評価と改善を計画的に行うことが大切である。

本校では、児童の発達の段階や実態を踏まえ、「指導と評価の一体化」を図り、単元(題材)や単位時時間の指導計画の工夫改善に努めている。

6. 単元の指導計画(8時間)			
時数	主な学習活動	指導上の工夫や留意点	評価規準
第1次 1	・新出漢字を学習する。 ・教科書を読み、学習の意図しをもつ。 ・教科書の作例をもとに文章の書き方を考える。	・指導目標を明確にする。 ・作例を読み、思ったことを発表させる。	【関】 ・好きな生きものや植物について、去年の一年生に書いて知らせようとしている。 【観察、思考】
第1次 2	・学校の中で一番好きな場所(緑で育っている木や花や鳥山)知らせたいものを見つけたり、話す。 ・自分の決めたいものを書かせる。	毎時の主な言語活動を記載する。それらの言語活動を通して単元の目標に達することができるよう、児童の実態に応じた教材・教具の効果的な活用や学習形態の工夫を図る。	
第1次 3	・絵を描くあてを確かめ、絵の絵を丁寧に描く。		
第2次 4	・作例を見て、観察カードに書き込みの意図を確かめる。 ・観察カードに、思ったことを書き込む。	・実際に植物をしたら、描いたりすることで気づいたことを書き込ませる。 ・色や形、大きさ、様子(どこに)、使い方等見つける機会に気づかせる。	【観察カード】
第2次 5 本時	・書き込みを「文」にする。 ・作文カードを、友だちがうして読み合ひ、知らせたいものが書かれているか確かめたり、アドバイスしたりする。	・作文カードを用意し、観察カードのメモから主題を整理した一文を書かせる。 ・知らせたいものに対する自分の思いや、それを選択した理由なども書かせる。	【書】 ・見つけたことをもとに、一つの文に一つの事項を書いている。 【書】 ・題と語や文と文との続き方に注意して書いている。 【作文カード】

V 成果と課題

【成果】

- 児童の実態に即したスモールステップでの取り組みや、書くための手立てを講じてきたこと、目的をもったペア・グループでの話し合い(助け合い・認め合い)が、児童の意識の変革(「少しは書くことができた。」「書けるようになった。」)につながった。
- 本単元でどのような力をつけていくのか、1時間毎の言語活動を大事にきめ細やかに見て積み重ねることができた。手順や方法などを身につけるための指導を意識することができた。
- 間違いや考え方の違いを大事にする授業づくりと、児童なりの自己評価を行うことで、表現することへの抵抗感を減少させることができた。

【課題】

- 書くことをメインに取り組んできたが、それをもとに話す、相手の話を聞く・考えるなど、更なる言語活動の充実につなげていく必要がある。C→Bの支援は一定の効果は見えるが、B→Aの支援については日常的な取り組み・積み重ねの中で、より良いものを志す児童の意識を高めていくことも必要だろう。
- 児童の実態に即した教具の活用と工夫(ICT 機器のメリット・デメリットの把握と、より効果的な活用・場面の工夫)を授業づくりの中でまとめていく。

【今後に向けて】

- ・今年度で3年計画の研究が一区切りした。次年度以降閉校までの2年間、研究の成果と本校としての取り組みを継続しつつ、課題を受けた新たな研究を進めていきたいと考える。

1. 研究主題

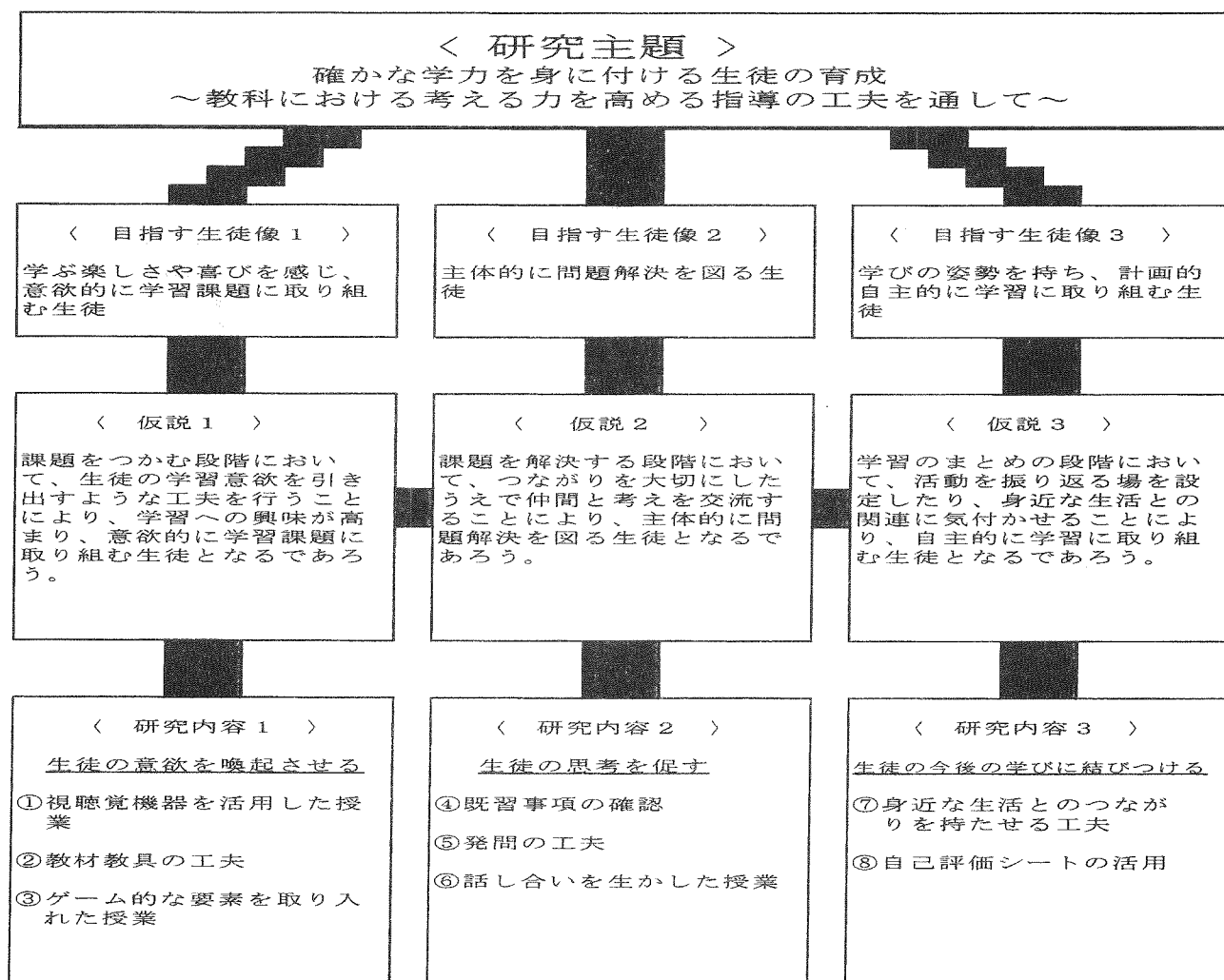
確かな学力を身に付ける生徒の育成 ～教科における考える力を高める指導の工夫を通して～

2. 主題設定の理由

本校の生徒は調査の結果から「基礎的・基本的内容については意欲的に身に付けようとする」「身に付けた知識や技能を伸ばし、活用しようとする姿勢に欠ける。あきらめが早い。」
「どの教科においても知識や技能を伸ばし活用しようとする姿勢に欠ける。」という実態が浮かび上がった。新学習指導要領においても、今日的な教育の課題として「基礎的な知識・技能を習得し、考え、判断し、表現することによって、さまざまな問題に対応し解決する力が必要。」であることが明確化されている。

そこで本校では平成 23 年度から 3 年計画で、教科における考える力を高める指導の工夫を通して、確かな学力を身に付ける生徒の育成を図るために主題を設定し、研究を進めてきた。

3. 研究構想図



4. 研究の仮説

仮説1

課題をつかむ段階において、生徒の学習意欲を引き出すような工夫を行うことにより、学習への興味が高まり、意欲的に学習課題に取り組む生徒となるであろう。

研究内容1 生徒の意欲を喚起させる

授業の導入時に体験的学習を行うことにより、課題をつかみやすくなり、次の学習活動への意欲もわいてくる。

①視聴覚機器を活用した授業 電子黒板・ビデオ・CD 他を活用する。

家庭科 「3年 献立作りと食品の選択」

過程	学習活動の流れ	指導（☆）・評価（■）
展 開	3. 課題解決への取り組み（ワークシートに必要事項をまとめる）	☆視聴覚教材を使い、本時の授業が将来の職業につながる可能性があることに触れ、同時に本時の授業の流れやプリント記入方法などを確認させる。 ☆1PTあたりの量が把握できるまで机間指導する。

動画を用い、視覚に訴えている。生徒もイメージをつかみやすい。

②教材教具を活用した授業 実物を生徒が見る、手に取る場面を取り入れる。

英語科 「1年 PROGRAM4 リサイクル活動」

過程	学習活動の流れ	指導（☆）・評価（■）
導 入	1. 教師と英語であいさつを行う。 2. 可算名詞を復習する。 3. 複数形の作り方を復習する。 4. 可算名詞と不可算名詞を確認する。	☆生徒を指名しながら可算名詞を確認する。 ■積極的に発表することができる。 ☆生徒を指名して、<u>実物を数えさせる</u>。

生徒の視覚に訴えたり、実際に数える場面になった感覚で学習することができる。

③ゲーム的な要素を取り入れた授業 競争する場面やクイズ他を取り入れる。

英語科 「1年 MyProject1 自己紹介をしよう」

過程	学習活動の流れ	指導（☆）・評価（■）
導 入	1. 教師と英語で挨拶を行う。 2. Bingoを行い、英語で話す空気を生み出す。	☆大きな声で行う。 ☆リズムよくBingoを行う。

ゲーム感覚で授業に参加するため、楽しんで学習することができる。

仮説2

課題を解決する段階において、つながるを大切にしながら仲間と考えを交流することにより、主体的に問題解決を図る生徒となるであろう。

研究内容2 生徒の思考を促す

考えるためのヒントを与えられた上で生徒たちが課題に取り組むので、解決するための知識が備わり、進んで課題解決に向けて取り組んでいく。

④既習事項を確認し、その後の学習活動に生かした授業 考えるための事項を事前に確認する。

英語科「1年 My Project 1 自己紹介をしよう」

過程	学習活動の流れ	指導（☆）・評価（■）
展開	4. 「発表例」を読み、自分に使える表現にはマーキングをする。 5. 1時間目と今マーキングした文のうちから自分に使える表現を探し教科書の空欄を埋める。	☆机間指導をしながら、生徒たちが的確にマーキングしているかを確認する。

以前学習したことを確認し、その後の学習に活用できる流れになっている。

⑤発問の工夫 解決に至るまでの道筋をつけられるような発問やワークシートの活用。

技術科「2年 ジャガイモ、ダイコンの栽培」

過程	学習活動の流れ	指導（☆）・評価（■）
展開	2. 作物の栽培技術や栽培の仕方が違うことを理解する。 発問:「商店で販売されている作物の値段の方が安い理由をどのように考えたり調べたりしたらよいでしょうか。」	

追究の仕方を考えさせる発問をすることにより、既習事項を振り返る場面を与えている

⑥話し合いを生かした授業 考えを交流する、助け合う場面で活用する。

数学科「1年 関係を表す式」

過程	学習活動の流れ	指導（☆）・評価（■）
展開	・4人グループを作る。 ・グループ内で自分の作った問題と等式を発表する。 ・グループ内で一番良い問題を決定し、模造紙に書く。	■数量の関係を等式に表すことができる。 ☆事前にグループわけをしておく ■自ら考えたことを相手に伝えることができる。 ☆黒板に貼る。

他者の考えから良い例に触れることにより、自分の考えの幅が広がる機会になっている

仮説3

学習のまとめの段階において、活動を振り返る場を設定したり、身近な生活との関連に気づかせることにより、自主的に学習に取り組む生徒となるであろう。

研究内容3 生徒の今後の学びに結びつける

学習内容が自分とどう関連しているのか理解することで、学ぶ意義に気づき今後の学習に対する意欲がさらに高まっていく。

⑦身近な生活とのつながりを持たせる工夫 自分の生活や他教科の学習と密接に関わっている例を紹介する。

特別支援学級 数学「お金の計算、支払いをしよう」

過程	学習活動の流れ	指導（☆）・評価（■）
展 開	・2組に分かれて買い物をする。 7分で交代する。 ①1, 2年生 ：商品を各自が選ぶ。 ②3年生 ：レジを打つ、金額を言う。 ③1, 2年生 ：代金を支払う。 ④3年生 ：おつりを渡す。 ・財布は、先ほどのお金に500円玉を1枚入れる。 ・うまく支払いができた人は、買った商品名、値段をプリントに記入する。	☆Bがうまくできなかった人には、再度食券の買い物をさせる。 ☆1000円以内で買えるものを予想し、暗算で計算しながら商品を選びなおさせる。 ☆金額をオーバーした人は、商品を選びなおさせる。 ■計算しながら、計画的に買い物ができる。 （観察、ワークシート）

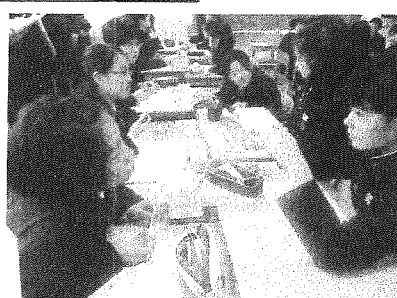
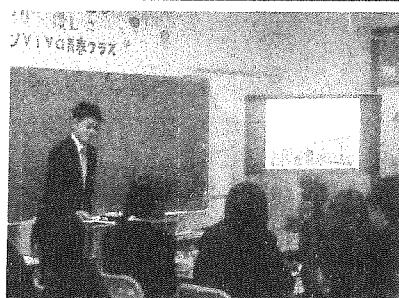
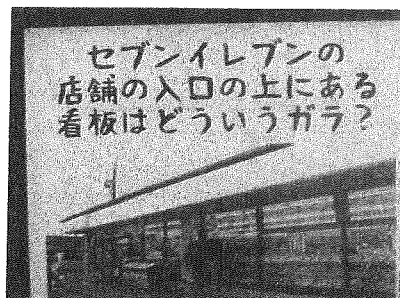
実際の買い物の場面を、学習活動の中に取り入れている。

⑧自己評価シートの活用 単元の最初に評価のポイントを提示し、最後に自己評価や授業評価を行う。

保健体育科 「2年 柔道」

過程	学習活動の流れ	指導（☆）・評価（■）
ま と め	1. 集合整列 2. 学習ノートへの記入 3. 感想を述べる 4. 次時の予告	・服装をただし整列する ・本時の自己評価を行う ・膝車をかけられての感想を2, 3人に述べてもらう。 ・正しい礼法で挨拶する

ノートに記入することを通して、活動を振り返ることにより、自身の成長を確認している。



4. 実践資料（平成 25 年 11 月 15 日実施 2 年社会科指導案）

1. 単元名 第 3 章 日本の諸地域

教材名 第 3 節 近畿地方－歴史の中で形づくられてきた人々のくらし－

3 古都の成り立ちと現在

2. 研究の視点に関わって

- ・ 視聴覚機器を活用して、本時の学習内容に関連した映像を見せることによって、学習課題についてのイメージや意識を全体で共有し、意欲的に学ぶ姿勢を整えるよう工夫する。
→ 研究内容 1・①
- ・ 教師の発問や学習課題に対して、前時までの「地理的な見方や考え方」や「地図の読図や作図」、歴史的分野の知識・技能など既習事項を活用させることによって、生徒がゲーム的な要素をもって意欲的に思考するよう促す。
→ 研究内容 2・④⑤ 研究内容 1・③
- ・ グループや全体での話し合いを充実させ、思考・判断の過程や結果の表現方法を共有させることによって、学びあいの中で課題を追究する場面を設ける。
→ 研究内容 2・⑥
- ・ 学習活動を繰り返る場面で、地方的特殊性とともに一般的共通性を見つけることによって、学習内容が身近な地域の生活にも関連していることに気付かせる。また、自己評価・授業評価を行い、本時をふり返り、次時への見通しをもたせることで、PDCA サイクルにつなげていく。
→ 研究内容 3・⑦⑧

3. 本時の学習

(1) 目標

- 1 古都に残る歴史的な町並みや伝統的な文化の歴史的価値を理解し、観光業との関連を考察する。
- 2 歴史的な景観や町並みの保存と開発について、規制と権利の視点から多面的に考察する。

(2) 学習の展開

	学習活動の流れ	指導（☆） 評価（■）
導入 (10分)	1. 前時の学習を振り返る。 2. 考察の中核となる景観写真（京都市内のコンビニエンスストア）について考察する。 ★① → 身近な地域にあるコンビニエンスストアの外観を想起する。（グループ）★③ 考察の中核となる景観写真 【京都市内のコンビニエンスストア】 3. 本時の課題を確認する。 なぜ、京都市のコンビニは特徴的な外観をしているのか考えよう！	☆「歴史的背景を中核にして、近畿地方の特色をとらえる。」 ☆VTR で補足し、身近な生活との違いに気付かせ、課題意識をもたせる。

展開 (30分)	4. 「なぜ、地味な看板なのか？」店側の立場になって考察する。(一斉) ★⑤・⑥ 5. 「なぜ、外国人の観光客は京都に来るのか？」観光客の立場になり、「見たいもの」を地図帳から探して発表する。(一斉) ★①・⑤・⑥ 6. 京都・奈良の町並みの特徴をまとめる。 ★④ 7. 本時の課題を再確認して、まとめる。 ★⑤	☆P185「京都市を訪れる観光客数の変化」をヒントに考察させる。 ☆VTRで補足しながら、歴史分野の既習事項と関連づけた発問をする。 ☆既習事項(地図記号、歴史的知識など)を活用させる。 ☆京都・奈良の特徴について、本文の重要語句を中心にまとめ、板書する。 ☆生徒の意見を引出しながら、課題に対する「まとめ」を板書する。 ■古都の歴史的価値を理解し、観光業との関連を考察しているか。 【行動観察 評価1】
まとめ (10分)	8. 「あなたが、京都市に住んでいたらどうする？」について、まとめシートに自分の意見を書く。 ★⑦ 9. 自己評価シートで学習をふり返り、次時の学習を知る。 ★⑧	■歴史的な景観の保存と開発について、規制と権利の視点から考察し、課題を追究しているか。 【ワークシート 評価2】 ☆次時の学習について解説する。

(3) 評価

- 1 古都に残る歴史的な町並みや伝統的な文化の歴史的価値を理解し、観光業との関連を考察することができた。
- 2 歴史的な景観や町並みの保存と開発について、規制と権利の視点から多面的に考察することができた。

5. 研究の成果と課題、今後に向けて

成 果

本校では、授業改善の参考にする目的で、1学期の初めと夏休み前後の計2回、授業評価アンケートを実施した。1回目の授業評価アンケート後、結果が思わしくなかった項目に関わって、工夫・改善を試み、2回目の授業評価アンケートを実施した。単元の違いにもよるが、研究内容の項目を実践化した結果、ほとんどのアンケートにおいて、プラスの評価が増えマイナスの評価が減った。

課 題

研究仮説3の研究内容「身近な生活とのつながりを持たせる工夫」では、全体として日常と学習内容を結びつけた実践が少なかった。今後は実際の生活の一コマと学習課題を結び付けて生徒に提示するなど、生徒が実感を伴うような指導を推奨していく必要がある。

今後に向けて

今年度で3年計画の研究が一区切りを迎え、次年度以降また新たな主題設定・追究していくことになるが、次の2点を推奨し、日ごろから実践していきたいと考えている。

- ・家庭学習の習慣づけとその内容を充実させるための指導。
- ・授業において、学習内容と身近な生活とのつながりを持たせる場の設定。

○研究主題

豊かに伝え合う力を身につけ 自らを高める子の育成

～国語科における話す・聞く・書くの基礎基本を身につけ表現力を高める授業改善を通して～

○主題設定の理由

新学習指導要領では、「生きる力」をより一層はぐくむことを目指している。生きる力である知・徳・体の中で、知の部分、確かな学力をはぐくむとは、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して思考力、判断力、表現力をはぐくむことである。その際、論理的思考やコミュニケーション、感性・情緒の基盤となる言語能力の育成のために言語活動の充実が不可欠である。絵鞆小学校の経営方針の中でも、学校課題を「確かな学力の育成～基礎基本の定着と活用による学力の向上～」と掲げ、価値観の多様化、ライフスタイルの変化と子どもたちを取り巻く環境が激変する中、正しく情報を選択したり、知識や情報を使いこなしたり、伝え合って共有するといった豊かな学びが必要であると考え、本校児童の実態としては、平成 23 年度の標準学力検査の結果から、「書くこと」「話すこと・聞くこと」に誤答や無答が多く見られるという課題があった。「書くこと」「説明すること」など、目的に応じた言語能力と言語感覚が身につけていないという課題も見られる。以上のことから、本校では、国語科の話す・聞く・書くといった基礎基本の定着と表現力を高める授業改善をすることによって、「豊かに伝え合う力を身につけ 自らを高める子の育成」を目指し、本主題・副主題を設定した。

○研究仮説と研究の内容

【仮説 1】「話すこと」の活動において、表現方法を伝え、活用する活動を設定することにより、みんなにわかりやすい発表をすることができるだろう。

研究内容 1

- ・話してみたいくなるような課題設定の工夫
- ・発達段階に応じた話し方、話す技能のおさえ
- ・話す力の変容を捉える評価方法

【仮説 2】「聞くこと」の活動において、言葉遣いや言葉の意味、話の構成や意図に気をつけた聞き方をさせることにより、自分の考えを広げたり深めたりすることができるだろう。

研究内容 2

- ・聞くことの効果を高める学習形態の工夫（ペア・数人のグループ・全体・ポスターセッション・学級会形式・討論など）
- ・聞き取りメモの取り方
- ・聞く力の変容を捉える評価方法

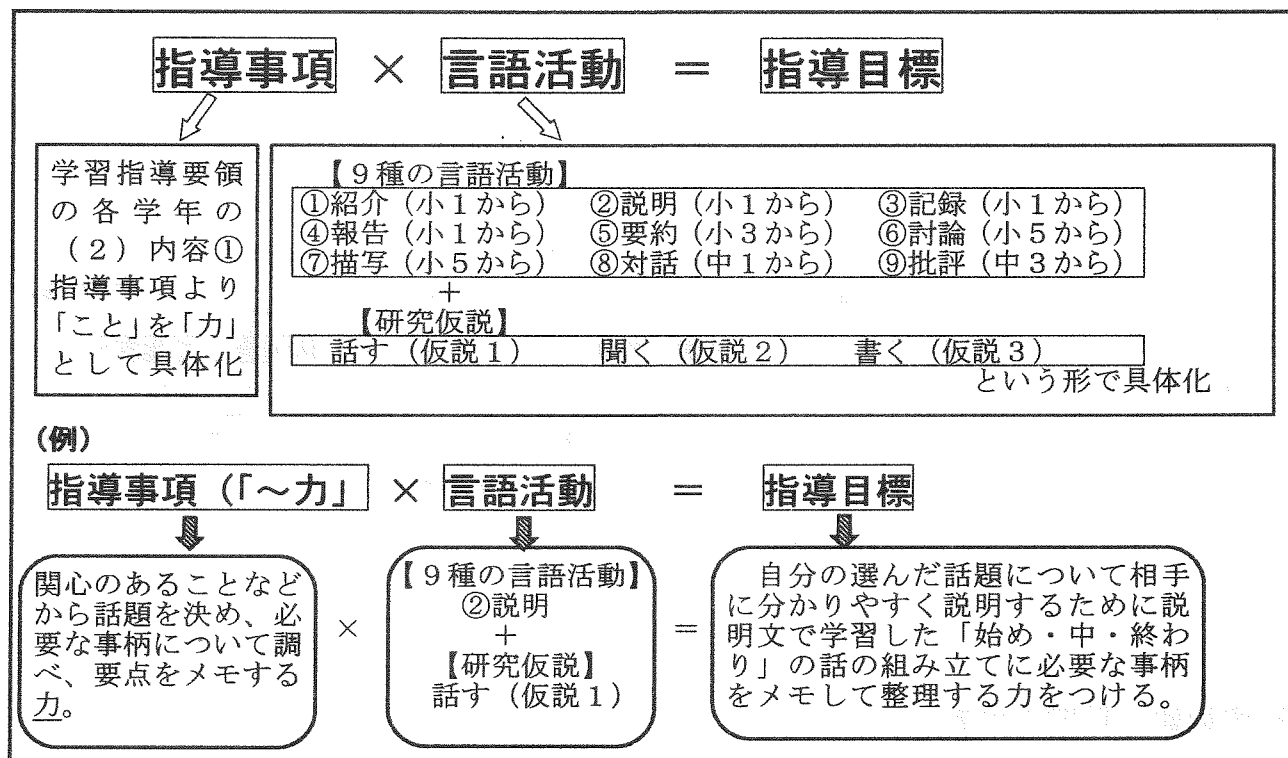
【仮説 3】「書くこと」の活動において、情報を正確に理解したり自分の考えを整理したりする技能を身に付けさせることにより、自分の考えに自信をもち、進んで学習したことを生かそうとすることができるだろう。

研究内容 3

- ・文章表現力を高める学習過程の工夫（一時間の中で、単元の中で、日常的指導の中で）
- ・漢字や語句を活用して表現力を高める手立て
- ・正確で見やすいノート指導
- ・語彙を増やすための読書や辞書の活用の手立て

○単元を貫く言語活動を位置づけた授業改善の視点

本校では、「場や目的に応じて、相手に伝わりやすい表現を工夫できる子ども」「考えを広げたり深めたりする子ども」の2点を目指す子ども像とした。児童の実態調査を行い、低学年・中学年・高学年・特別支援の4ブロックが「話すこと」「聞くこと」「書くこと」の3つの仮説の中から研究対象を焦点化して研究に取り組むことで、目指す子ども像に迫る研究が行えると考えた。その際、各ブロックの指導目標を明確にするために、具体的に次のような視点で絞り込んでいった。



尚、言語活動については、学習指導要領で取り上げられている物を上記のように9種類と分類し、洗い出した。このように考えることで、言語活動を「話すこと」「聞くこと」「書くこと」のうち、どの研究仮説とどのように絡めた学習活動をするのかをおさえることができる。指導目標をもって授業を構築することで、単元を貫く言語活動を指導計画の中に位置づけた授業改善ができると思う。

○研修計画

学期	研修日	主な内容	公開研関係
1 学期	6 回	〈全 体〉研修の構想・今年度の計画を確認 〈ブロック〉各ブロックの構想・重点の確認・分担決定 〈全校授業研〉5/31 特別支援ブロック・高学年ブロック 6/28 中学年ブロック・低学年ブロック	・ 1 次案内送付
2 学期	10 回	〈全 体〉研究紀要検討・公開研究会に向けての作業分担 ・ 打ち合わせ・研究会後の反省 〈ブロック〉公開研究会公開授業の指導案検討・プレ研授業	・ 2 次案内送付 ・ 研究紀要作成 ・ 研究発表準備
3 学期	2 回	〈全 体〉研究の成果と課題の確認・来年度に向けての方 向性を確認 〈ブロック〉研究の成果と課題を検討	

○研究の内容

〈仮説1「話すこと」の授業改善〉

実態把握により、低学年ブロックと特別支援ブロックが「話すこと」に焦点化して研究を行ってきた。

【低学年ブロックの実践】

(1) 「話すこと」に焦点化した理由

「話したい」「発表しよう」という意欲を持つ児童が多いが、表現方法がわからず上手に伝えることが苦手である。語彙不足もあり、適切な言葉で自分の思いを表現できない場面も多い。これらの児童の実態から「話すこと」の能力を、学習した知識・技能を繰り返し用いたり、実際の場面において使いこなす機会を多くもったりすることにより身につけさせようと考えた。身につけるべきねらいを明確にし、意図的・計画的に位置づけ、確実に指導に努め「話すこと」の能力の充実、向上を図ってきた。

(2) 授業実践から（指導案抜粋）

国語科学習指導案

1. 単元名 「はっぴょうしよう」～あったらいいな、こんなもの～

2. 単元の目標

◎自分の考えた「物」について、相手にわかるように、話す事柄や順序を考え、声の大きさや速さなどに注意しながら、はっきりした発音で、敬体で話すことができる。

◎大事なことを聞き落さないようにしながら友達の話聞き、感想を述べたり質問をしたりすることができる。

◎互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うことができる。

発達段階に応じた話し方や話す技能についての目標を掲げ、身につけさせたい力を明確にした。また、「話す力」を育てる上で合わせて身につけさせたい力が「聞く力」であると考え、「聞くこと」についても取り上げることとした。

6. 本時の指導

(1) 本時の目標

◎話し方に気をつけて発表したり、友達の発表を聞き、質問や感想を述べて交流したりすることができる。

(研究仮説1)

(2) 言語活動

対話や話し合いの中で、何について話しているのか、内容を確認したり、わからないことを質問したりすることができる。

相手に応じて話す事柄を順序立てて、話す力（イ）

×

説明

前時に確認した「話を聞く時に気をつけること」を受けて、自分が話す立場になった時に、相手に伝わるように話すことや友達の発表を聞いて感想を述べたりすることが学習の課題である。そのためには、順序立てて説明したり、必要な事柄を整理したりすることが求められる。また、声の大きさや話す速さについても意識させたい。

話し方・聞き方のポイント

- ・声の大きさに気をつける。
- ・話す速さに気をつける。
- ・聞く人を見て話す。
- ・静かに聞く。 ・最後まで聞く。
- ・集中して聞く。 ・話す人を見て聞く。

「話すこと」の指導目標の具現化を図るために、本時で具体的に扱う言語活動について明記した。授業では、発表会の進め方について左記について確認し、発表の場面や質問・感想を述べる場面においてポイントを意識させることで、効果的に学習を進めることができた。

〈仮説2「聞くこと」の授業改善〉

実態把握により、中学年ブロックが「聞くこと」に焦点化して研究を行ってきた。

【中学年ブロックの実践】

(1) 「聞くこと」に焦点化した理由

聞くことが自分のためになる、役立つ情報を手に入れる手段だという必要感を持っていないことが、児童の実態の根本にあると考える。「聞く」という心や頭の構えができるようにしたい。

(2) 授業実践から（指導案抜粋）

国語科学習指導案

1. 単元名 読んで考えたことを話し合おう「ごんぎつね」

2. 単元の目標

◎読み取った内容について自分の考えを友だちに伝えることができる。友だちの考えを聞き、自分の考えをより深める。

◎読み取った内容について自分の考えを友だちに伝えることができる。

◎目的に応じて書くとともに、書いたものを発表し合い意見を伝え合うことができる。

6. 本時の指導

(1) 本時の目標

○友だちの発表を、自分の考えと関わらせながら聞き、発言している。（研究仮説2）

(2) 言語活動

紹介の話の中心に気をつけて聞き、自分の感想をもったり、必要に応じて質問する力をつける。

話の中心に気をつけて聞き、質問をしたり感想を述べたりする力（エ）

×

紹介

読み取った自分の考えを友だちに伝えたり、友だちの考えを自分と比べながら聞いたりして、自分の考えをより深めることができるようにする。発表し合ってるだけの活動らないよう、論点を示し、今の話題と自分の考えを比べ、解決に向かって練り上げられるような話し合いにしたい。

学習過程 ○児童の活動 ・児童の意識

展開 ○互いの考えの共通点や相違点に気をつけながら、それぞれの話題を話し合う。【グループ】

- ・ごんはぐったりとうなずきながら、思っていたこと。
- ・ごんの償いの気持ちについて考えたこと。

○話し合いで深めた考えを話し合う。【全体】

- ・話し合うことで感じ方の違いを知る。

○友だちの発表を聞き、その感想を出し合う。【全体】

- ・初めに読んだ感想と比べて友だちの感想を聞いてから違いがあるか考える。

グループで決めた話題にそって、互いに自分の考えを伝えたり、聞いたりすることで互いの違いを知り思考を広げて深められた。

それぞれの話題についてグループで話し合ったことをもとに、全体で話し合い、友だちの発表をよく聞き、わかりやすい内容だったか交流し合うことになる。

読みを深めて友だちの考えを聞いてから、同じ考えや違う考えと比べてみて、自分の考えを深める手立てとなる。

〈仮説3「書くこと」の授業改善〉

実態把握により、高学年ブロックが「書くこと」に焦点化して研究を行ってきた。

【高学年ブロックの実践】

(1) 「書くこと」に焦点化した理由

話す活動の前提として、内容を整理して説明する力が必要となる。このため、書く活動を通じこの力を涵養したい。

(2) 授業実践から（指導案抜粋）

国語科学習指導案

1. 単元名 短歌を作ろう「たのしみは」

2. 単元の目標

- ◎短歌のもつ表現の効果を確かめたり、工夫したりすることができる。
- 短歌を短い話に書き広げ（リライト）、表現のしかたに着目し助言し合うことができる。
- 日常の場面を短い話にし、それをもとに短歌を作ることができる。

6. 本時の指導

(1) 本時の目標

- お話の文を読み合い、日常場面を想像豊かに文章化できている良さをを見つけ、自分の文章に生かしている。（研究仮説3）

(2) 言語活動

目的や意図に応じ考えたことなどを、文章全体の構造の効果を考えて文章にする力をつける。

自分の考えを明確にするため、文章全体の構成の効果を考える力（イ）

×

描写

短歌を書き広げたお話の文（リライト文）を推薦し合う中で、日常場面が浮かび上がる細かな表現を学びあい、それを自分の書き広げに生かしていく。また、日常場面のささやかなことをイメージ豊かに伝えることが短歌づくりのポイントとなることを意識化できることで、単元末の短歌作りの題材探しに生かしていけるだろう。

展開	○児童の活動 ・ 児童の意識
展開	○リライト文を読み、良いと思った所にサイドラインを引いていく。【個人】 ・ 見えるもの、におい、音など、細かなところまで想像し、自分も真似してみたい。 ○一人ひとりのリライト文を全体の中で発表する。 ○（4～5人の発表毎に）良いと思った所を発表し交流し合う。【全体】 ○「本日のおすすめ」の1つを選び推薦文を書く。【個人】 ・ どこがいいのか、着目点を使って推薦文を書こう。

単元末の短歌作りに欠かせない、描写の言語感覚を豊かにしていくためには、五感をはたらかせた表現の良さを具体的に教えた上で、このように自分で考えていく作業を取り入れることが効果的。

自分で良いと思った描写を発表する、交流すると、学習形態を変えて何度も話したり聞いたりすることで、描写についての言語感覚をさらに豊かに掘り下げていくことになる。

推薦文を書くことで本時での自己の学びを整理し、次時以降の短歌を書くときにつながる資料となっていく。

○成果と課題

〈話すこと〉

- 発表会形式での言語活動では、話す事柄や順序について一つ一つ考えさせて積み上げることが効果的だった。
- 話すことは、聞くことと表裏一体と捉え、話すことのポイントを際立たせるために、大事なことを落とさずに聞くポイントもおさえ、友だちとの話し合いを深めることができた。
- 発表する、聞くが活発に行われるよう、ペアやグループでの学習形態をとるのが効果的である。
- 学習形態や学習方法がわかると、同じ課題の繰り返しでは飽きてしまうことがある。話す力を段階的にステップアップしていくなど、課題設定の工夫も意欲を持続するためにも必要である。

〈聞くこと〉

- 物語教材の単元に、意図的に聞くことを設定することで、単元全体のつながりも明確になった。
- 他者と自分の考えを比べて聞くという視点で話し合い活動をすることで、より読み取ったことを深めることができた。
- 時代背景などの設定、会話や動作を表す言葉をもとにして、登場人物の心情を読み取らせたことを前提として話し合ったので、ごんは幸せだったかななどの主題に迫る話し合いも深まりがあった。
- 話したくなる姿勢、聞く必要性についての指導はまだ手探りの状態。学級の実態に応じて、教科書の手引きをもとに工夫して授業作りをしている。

〈書くこと〉

- 書き方、考え方を教える上で、班で協力して書く、一人一人が書くなど、段階的に書き方に慣れさせていく単元計画の工夫が効果的だった。
- 児童が書いた物へ励ましたり、もっと詳しく書くように助言したりする働きかけ、誰が書いたかを予想をしながら読み合ったりすることで、言葉の感覚を磨いていくことができた。
- 交流を通して、色の描写方法など、児童相互の優れた方法を取り入れて書き直すなどの高まりも見られた。
- 百マス作文など、日常的な積み上げも、書く力の向上に効果的である。
- 多様な表現が広がってくると、書いた物についての交流の時間や学習形態の工夫が問題となってくる。

〈研究全体に関わること〉

- 教科書、ねらい、単元、指導計画をよく研究し、単元を貫き、全体の見通しをもってすすめている。1時間ごとのねらいが明確になることにより、学習意欲につながることが児童の表情からもうかがわれた。ゴールからの授業づくりを考えて、単元を貫く言語活動が児童たちにも意識されていた。
- 研究をさらに深化させるには、単元で捉えた指導の充実が必要である。単元のゴールでどのような言語に対する力をつけるかと児童につけたい力をイメージして、段階的かつ系統的に計画を作ることが大切である。
- 評価、結末の工夫、充実が必要である。児童がどのような力をつけたか、発表交流だけではなく、読みや聞き取り、文の質や程度が高まっているかを改めて児童に書かせて見取るなどの工夫をし、日常の授業改善、継続、発展を図るとよい。
- 国語で培った言語能力は、理科、音楽科、道徳の授業などで表現するために生かされてきている。
- 言語活動、見通し、振り返り、掲示物、言葉遣い、教室環境の工夫など、学級それぞれの取り組みがなされているが、それを全体のものにできるとよい。

研究主題

『伝え合う力を高め、豊かにかかわる子の育成』

～「読むこと」を軸としながら、国語への理解力・表現力をはぐくむ～

研究主題設定の背景〈児童の実態と、これまでの指導の実態から〉

平成
二十
二
年
度

- 道徳の時間の研究・・・子ども達の学び合いを深めるために研修を続け、授業力を高めていく必要があることが明確となった。
- 全国学力学習状況調査の結果分析・・・特に、国語科では三領域の全てにおいて、学力が低いことに危機感をもった。（主な原因としては、学年を通しての系統的な指導ができていなかったこと。特に、国語科においてそのような指導実態が顕著であること。）
- 学校内部評価・・・勉強が大変だと感じている子どもがたくさんいることから、わかる喜びを大切にし、全員が参加し学び合える学習づくりや、確かな学力の定着と自ら進んで学習する能力の育成を図る授業改善に取り組むことが今後の課題となった。

これらの課題解決に向かって教育活動を行っていくためには、研修により教材分析の仕方や確かな授業構想力をもち、適切な教師の指導・支援のあり方を身に付け、日々の授業実践に生かしていくことが、我々教師に求められているという共通理解を図ることができました。

その具体として、国語科の中でも「読むこと」を軸としながら、国語への理解力、表現力を育てる校内研修を進めていかなければならないと考えました。

国語科の三領域全てにおいて学力が不十分であるということは、内言語活動を活性化するような授業が組織されていなかったと考えられます。このようなことから、「読むこと」領域の学習における読み深めの連続により内言語活動を活性化させ、認識形成に働く思考力・判断力を高めていくことこそ、本校児童に求められることであると考えました。「読むこと」領域と「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域との関連性を考え、内言を活性化する授業を通して国語の力を統合的に高めていけるのではないかと考え、研究主題を設定しました。

研究の仮説

三領域「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」における指導事項の関連性を、言語活動の根底にある能力面から捉え直し、その能力の育成を図る授業を創造・実践することで、豊かな言語力を育成できるのではないか。

（小仮説1）

説明的文章教材の学習に於いて、筆者の対象のとらえ方（認識の仕方）や、述べ方（読み手に対する効果的な伝え方）を追求し、内容・意味をよりよく理解することや表現の仕方を実感・評価することが、その後の外言語活動（表現）にも生きて働くのではないか。

（小仮説2）

「読むこと」領域の指導（学習）過程における育てたい力を明確にした上で、「話す・聞く」「書く」の外言語活動を取り入れたり、その学習形態を工夫したりすることで、伝え合う力・生きて働く言語能力を育成することができるのではないか。

研究の方法（3年次計画・・・今年度は3年次）

（理論研究）

- 国語科に求められているもの
～学習指導要領の歴史的考察から～
～系統表と指導事項～
～言語活動～
- 言語と認識・思考
- 論理的認識形成と思考
- 課題解決学習と思考形成
～直観・分析・統合的思考の流れ～
- 説明文の特質と指導のあり方

（実践研究）

- 研修理論を生かした授業作り
- 授業構想と授業分析
- 全員による研究授業の実践
～仮説検証のサイクル～
～成果と課題～
- 研究方法の確立
各ブロック研修～研究推進委員会～
全体研修～各ブロック研修



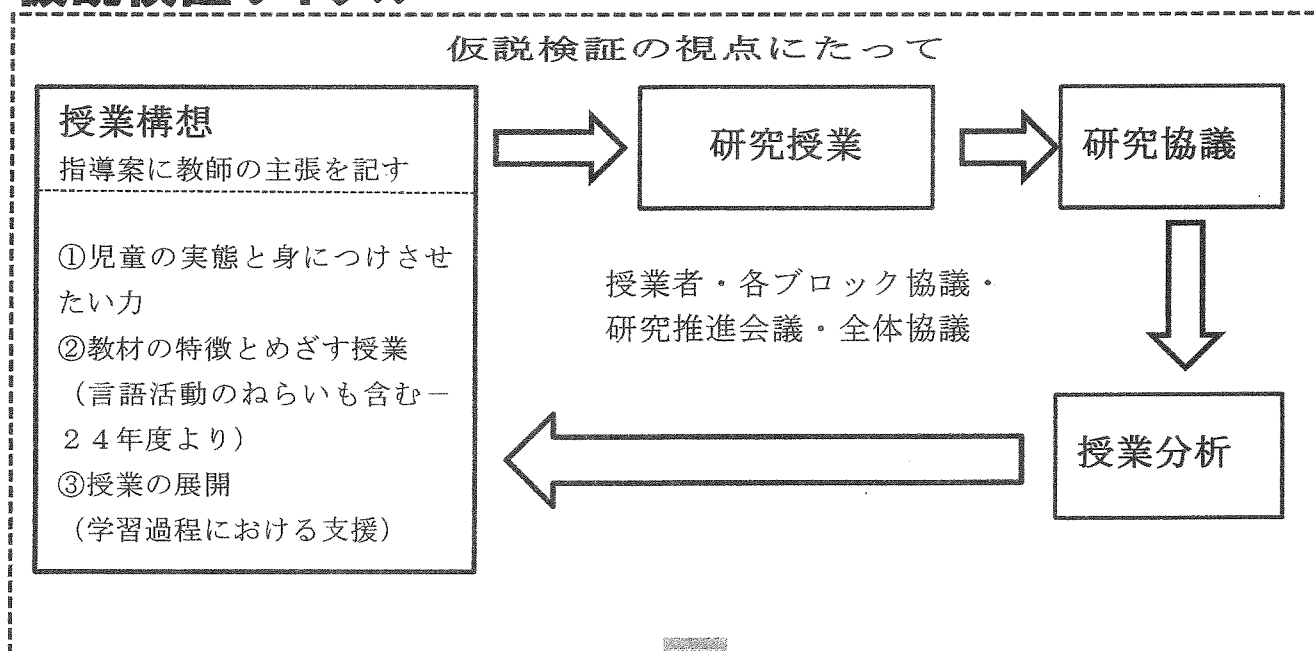
研究の重点

1年次・・・指導過程、課題解決学習

2年次・・・言語活動

3年次・・・公開研究会

仮説検証サイクル



低・高ブロック成果と課題

全体の成果と課題
（次年度へ）

本校では、事前に教材研究・分析をし、この教材を用いて「子ども達にどんな力をつけるのか」「どのように教えるのか」等の願いや方法・手段をしっかりともち、授業に向けての教師の主張（授業構想）を確立していくことの大切さを強く実感してきました。

今年度（平成25年度）は、1学期に全学級が校内公開授業を行いました。その指導案の一部と共に、授業構想を練るにあたって、本校で配慮してきたことを記します。

国語科学習指導案

日 時 平成25年6月25日（火）2校時
児 童 3年1組
男子11名 女子12名 計23名
授業者 教諭 下沢 恵

1. 単元名 読んで、かんそうをもとう

「イルカのねむり方」 幸島 司郎

「ありの行列」 大滝 哲也

2. 単元の目標

◎動物の生態について、答えに至る根拠を読み取り、段落や段落相互の関係を理解することができる。
(C読むこと イ)

○中心を明らかにし、理由や事例を挙げて感想を書くことができる。
(B書くこと ウ)

○動物の生態についての研究・解明を扱った文章であることに興味をもち、進んで読もうとしている。
(意欲・関心・態度)

3. 単元の指導計画（全9時間）

	学習活動～読むこと（◇） ～書くこと（☆）	言語活動	評価の観点	教師の支援（◆）
		（省 略）		
4	◇①段落を読み、「なぜ、ありの行列ができるのか。」という問いをつかむ。 ◇形式段落②③を読み、学者のウィルソンが「したこと」と「見たこと」を読み取る。 ◇段落内の文の構成について考え、説明の仕方の工夫に気づく。	・「したこと」と「見たこと」について班で交流する。	・「したこと」と「見たこと」を読み取っている。 ・説明の仕方の工夫に気づいている。	◆時間の経過を表す接続語にも着目させ、見たことが時間の経過で書かれていることに気づかせるとともに、③段落には、「したこと」と「見たこと」という事柄の順序で書かれていることが、説明の工夫であることに気づかせる。
5 本 時	◇④⑤段落を読み、ウィルソンの「したこと」と「見たこと」、「考え」を読み取る。 ◇③④⑤段落相互の関係を考え、説明の仕方の工夫に気づく。	・なぜウィルソンが「地面に何か道しるべになるものをつけておいたのではないかと考えたのかを班で交流する。	・ウィルソンの調べたことや見たこと、考えを読み取っている。 ・③④⑤段落のつながりを考え、説明の仕方の工夫に気づいている。	◆⑤段落の考えに至る根拠が③④段落に書かれていることに気づかせ、段落相互の関係をとらえさせる。

単元の中で、ただ単に同じような内容の学習を繰り返すのではなく、本単元の目標に到達することを目指し、授業構想をもとに段階を踏んで理解から表現につながる発展的な学習になるよう計画する。

児童が本単元に入る前のこれまでの学習を通して、どのようなことを身につけ、あるいは、身につけていないか、論理的認識に関しての児童の実態を記す。

さらには、本単元の教材と出会った時の元々の児童の直観的認識がどのようなものか、その認識を、どのようにして目標としている論理的認識に高めていきたいのかを記す。

4. 授業構想

①児童の実態と身につけさせたい力

系統表では、3・4年生の「読むこと」領域における身につけさせたい力として、「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと」としている。

そこで、本単元「読んで、かんそうをもとう『イルカのねむり方』『ありの行列』」の目標を、「動物の生態について、答えに至る根拠を読み取り、段落や段落相互の関係を理解することができる。」とした。動物の生態を明らかにする実験や観察、考えを読み取ることを通して、それぞれの段落は内容によって分けられており、さらに、問い（はじめ）— 調べたこと・考えたこと（中）— 答え（おわり）といった段落のつながりのある文章を構成しているという説明の工夫に気づかせる。

本学級の児童は、2年生時に、説明文教材「しかけカードのつくり方」において、文章に沿ってしかけカードを作った。その際に、『まず』『つぎに』『それから』『さいごに』の順序を表す言葉があったからと、筆者の説明の工夫について気づくことができた。そして、説明文教材「おにごっこ」では、「はじめ」「中」「おわり」という大まかな文章構成について学習してきた。よって、本単元最初の見開き二ページの教材文「いるかのねむり方」では、「はじめ」「中」「おわり」という文章構成で書かれて

て、えさの所へ行ったり、巣に帰ったりするので、ありの行列ができる」という答えに至る科学的な思考過程を読み取ることで、これらの段落相互の関係に気づかせたい。

「読むこと」領域のこのような学習により、「書くこと」領域において、「ありの行列」を読んだ感想を、何のことがどのように書かれているという根拠明らかにしながら書くことに生かされるものと考ええる。

本時の課題を記す。児童に提示する課題は、発達段階に応じ、以下の点をおさえたものになる。

低学年・・・説明の論理を最初から追求するよりも、「ああ、こういう述べ方があるのだな。この述べ方の方が、私たちにもよく伝わるなあ。」ということを実感できる授業をめざす。授業で手順を追うことで、最後の方で、書き方や展開の仕方が、うまいなあと感じられるようにする。

高学年・・・説明文には要旨があってそれを説明する文章構成になっている。要旨にせまるために説明部分においてどのような工夫がなされているかという、説明の仕方の工夫、伝え方のうまさ、表現のよさを追求していく学習にしていけるようにする。

②教材の特徴とめざす授業

本教材は、段落相互の関係を意識させるのに適した教材である。はじめに問いがあり、中では調べたことと考えたことが、おわりには問いに対する明確な答えが述べられた9つの段落で構成され、その関係に気づくことで説明の仕方のよさを実感できるものとなっている。

道しるべになるものをつけたのではないかと考えたということを捉えさせることで、③段落と④段落、⑤段落の関係に気づかせ、それが筆者の説明の仕方の工夫であることを実感させたい。

そこで、「ありの行列のふしぎについて読み取ろう。そのことを筆者はどのように説明しているのか考えよう。」という課題を設定する。

そして、児童は自力解決において、学者ウィルソンが「見たこと（観察したこと）」と「考えたこと」がどのようなことなのかを本文から見つける。その上で、「なぜ、ウィルソンがこのように考えたのだとみんなは思ったのか、話し合ってみよう。」という指示のもと交流するという言語活動を行う。児童の中には、⑤段落の「ウィルソンは、～、と考えました。」という文末表現に目を向ける児童もいるであろう。他には、文頭の「これらの観察から」という言葉に着目する児童もいるであろう。さらには、内容に言及し、「前に出てきた二つのことを調べたから考えた。」と考えに至った根拠を述べる児童も出ることを期待したい。それらのことにより、次の段階で⑤段落の「考え」と、そこに至る根拠となる③と④段落の「調べたこと」の段落相互のつながりを捉えさせる際の布石となるようにしたい。

本時でどのような言語活動を行うのかを記す。教師が何をねらい、どんな言葉を児童からださせ、どんなことを交流させたいのか。それが何につながるのか。本時でねらう論理性を帯びた概念を形成していくために、意図的な言語活動をさせる。

深める段階においては、前時に学習した「巣の近くに砂糖をおいた」実験・観察と、本時に学習している「ありの行列を石でさえぎる」実験・観察により、ウィルソンが導き出した「地面に道しるべになるものをつけておいたのではないかと」という考えに統合していく。「⑤段落だけを読んで、ウィルソンがどうして考えたのかがわかるだろうか。」という発問により、③段落と④段落があって、⑤段落の考えに至ったという段落相互の関係に気づかせたい。

次に、③段落と④段落の文章の順序を変えて提示し、「これでもいいかな。」と問いかけてみる。児童は、③段落の「はじめに」

論理的認識の形成過程を前提とし、課題解決学習をベースに、「つかむ→見通す→探る→深める→まとめる」の5つの段階で展開する。

③授業の展開（学習過程における支援）

つかむ段階では、前時を想起し、③段落のしたこと（実験）が、「巣から少し離れた所に砂糖をひとつまみ置いたこと」で、見

たこと（観察）が、「一匹のありが砂糖を見つけ持ち帰った道すじを通して行列ができたこと」であったことを確認する。そして、④と⑤段落を一読し、内容の大体をおさえる。その際には、学者ウィルソンがしたことは何かを見つけるという音読の目的を

深める段階では、グループで交流したことを発表する。児童からは、「ありの行列について調べてきたから。」や「⑤段落に、『～、と考えました。』と書かれているから。」などの考えが出ると予想する。そこで、教師は、「⑤段落だけを読んで、ウィルソンがどうしてこう考えたのかわかるだろうか。」と問いたい。多くの児童は、わからないことに気づくであろう。さらに、⑤段落の文頭の「これらのかんさつから」という言葉にも着目させながら、最初に砂糖をひとつまみ置いてありの行列がどうなるのかを調べる③段落の実験・観察と行列に石を置いて行く手をさえぎる④段落の実験・観察の二つから導いた考えだということに気づかせ、③④⑤段落が関係していることを理解させたい。

各段階において何をねらうのか、教師がしっかりと構想をもち記す。「探る」段階の指示は、その後の展開を踏まえたうえで、児童が自力で取り組めるよう明確なものとする。

5. 本時指導案

①本時の目標

- ・「ありの行列のふしぎ」について調べたことから導き出した、ウィルソンの考えについて読み取ることができる。
- ・段落のつながりを考えて文章構成をとらえ、筆者の説明の仕方の工夫に気づくことができる。

②授業の展開

	児童の学習活動	教師の支援
つかむ	○前時の学習を振り返る。(②③段落) ・したことーありの巣から離れた所に、さとうをおいた ・見たことーはじめに、1びきのありがさとうを見つけた やがて、巣に帰っていった すると、巣の中からたくさんのありが出てきた そして、列を作って、さとうの所まで行った ふしぎなことに、行列は、はじめのありが帰りに通った道筋から外れていない ○④と⑤段落を音読する。 ・したことを全体で確認する。 →道筋に大きな石をおいて、行く手をさえぎってみた ○本時の学習課題を知る。 ありの行列のふしぎについて読み取ろう。 そのことを、筆者はどのように説明しているのか考えよう。	●前時の掲示物を用いて振り返る。 ●物のよく見えないありの様子であることを確認する。 ●音読の目的を与える。 ーウィルソンがしたことは何かを見つける。

③本時の評価（省略）

④板書計画（省略）

この校内での授業公開後、担任が授業分析を行い、ブロック・全体研修を行いました。この成果と課題とこれまでの研究の積み重ねを生かして、9月28日に公開研究会を開催しました。公開研究会や1年を通しての理論研修、研修を生かした日々の実践を通して・・・

今年度の成果と課題(概要)

①小仮説1について

●成果

低学年（1～3年生）は、言葉と言葉、文と文、段落と段落の関係を捉えられる授業を展開することで、説明の仕方があるということや、その説明の仕方によって読み手がよくわかるということを経験することができた。

高学年（4～6年生）は、内容意味のみならず、同時に説明の仕方についても児童が追求していく授業を展開することで、より文意と文体が一致した実感・評価をもつことができた。そのことは、「まとめる」段階において、児童からは単に「事実」や「根拠」といった抽象化された言葉だけではなく、文意と文体のつながりをもってその実感や評価などを学習してきた深い理解をもとに話しつつあることにつながった。

全学年に共通しているのは、単元の目標に向かって、段階を踏み発展していく指導計画であったこと、1時間の授業のどの段階においても教師が課題と自力解決への指示を明確に児童に示すと共に、認識が高まっていくような意図的な発問をすることを意識し実践することができた。

また、『読むこと』を通して、その後の外言語活動に生かされるのではないかと、と小仮説にあるように、同単元の中で、説明的文章教材を通して培った認識が「書くこと」に生かされることを感じることもできた。

児童にとって「書くこと」は、外言語活動の中で容易なことではない。であるから、内容さえわかればいいという文意だけ、書き方の形さえわかればいいという文体だけという一方向的な指導では、児童は書くということに増々難しさを感じるものと考えられる。よって、これまでに実践で意識してきたことはもとより、教材を通して学習してきた「読むこと」が効果的に生かされるよう、その教材の「読むこと」で学習してきたことをまとめた掲示物を活用しながら、「書くこと」に取り組ませることが効果的であった。

○課題

児童に提示する「本時の課題」の内容に十分配慮する必要がある。児童にどんな概念を作りたいのかが定まっていなかったり、授業を展開する中での発問のような、作りたい概念に到達していない課題だったりすることがまれに見られた。よって、教師の綿密な教材分析と授業構想をもとに、授業を通して児童に形成させたい概念はどのようなものなのかをおさえ、課題を設定しなければならない。

小仮説2について

●成果

昨年度より課題解決学習の中で、「話す・聞く」という言語活動を取り入れてきた。具体的には、「探る」段階での児童個々での自力解決の後に、グループで交流することを行ってきた。今年度は、本時でねらう筆者の説明の仕方のよさの実感に至るための布石となる話し合いになるようにすることがより意識され、実践することが概ねできた。教師は、何のために、どのような言葉に着目させ、どのようなことを出させたいのか（出るのか）、構想をもっていなければならない。意図的な言語活動を取り入れることで、児童の内言語の活性化を促し、思考を表出することで、伝え方を学ぶことにつなげることができていたと考える。

○課題

昨年度から引き続き、「話す・聞く」活動を取り入れてきて成果が見られたが、1時間授業の中で、内言語の活性化のために、「書く」活動も取り入れることはできないのか、あるいは、効果的に取り入れるための在り方について今後も深めていきたい。

今年度で本校の研修の3年次が終わりますが、研修理論に基づいた仮説検証のサイクルを通して、確かな教材分析・授業構想をすることの大切さを実感してきました。このことを突き詰めることができれば、児童の気づきやよい発言も授業の中で生かせず、学習の終わりになっても生活概念や既存学力のままで終わり、身に付けさせたい高次の概念に導くことができないのです。

さらに、発達段階に応じて確かな力を積み重ねていくことでの児童の成長が見られ、1～6年の系統的な指導の大切さも強く感じました。当該学年以外の授業についても当事者の意識をもち協議し、実践について日常的に交流したことを通しても実感してきました。まだまだ児童の力を伸ばし切れしていないところがありますが、単元全体、さらには、1年間を見通した反復的・螺旋的指導の視点に立った発展的な指導をし、それが全学年を見通した系統的な力を伸ばしていくことにつながることを念頭に置き、今後も研修に励みたいと思います。

室蘭市立東明中学校

1、研究主題

『確かな学力の向上をめざして』

～基礎・基本的な内容の習熟、定着を図る授業の工夫～

2、主題設定の理由

昨年度から全面実施された新学習指導要領の改訂ポイントとして、「生きる力」の知的側面である「確かな学力」を育成するために、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」や、それらを活用して課題を見だし解決するための「思考力・判断力・表現力等の育成」や「主体的に学習に取り組む態度」が重視されている。

本校では、新学習指導要領実施への移行に伴い、教育課程の方向性を検討していくために意見交流を行った。その結果、基礎・基本の定着がなされていない生徒が少なからずいるということ、その子たちに基礎基本を定着させ意欲を持たせるのに苦労しているということが各教科共通の課題として浮き彫りとなり、その問題点を克服するために、“基礎基本の定着”を研究主題に設定し、研究授業や話し合いを重ねてきた。また、本校の教育重点目標の1つに「基礎・基本的な内容の定着を図る個に応じた学習指導の充実」が設定されていることも加味し、3カ年計画の最後となる今年度は、これまでの成果を確かめるとともに、確かな学力の向上に向けた研究実践のさらなる深化を図る年と位置付け、研究を進めている。

3 研究の仮説

本校では目指す生徒像を「基礎基本的な内容の習熟・定着を目指し、意欲的に学習することができる生徒」とし、研究主題に迫るための手段として、研究仮説を1つに焦点化し設定した。

研究仮説1：基礎的・基本的な学力の定着を図る

授業（単元）の中で、基礎基本の内容を明確にし、目標を持たせることや、繰り返し学習する場を設けること、また個に応じた指導（支援）や、言語活動の場面を設定することにより、基礎基本的な知識・技能が身に付いた生徒を育成できるであろう。

授業を行っていくにあたり、この研究仮説の中に盛り込まれた4つの事柄を意識し授業を組み立て進めることで、目指す生徒像により近づくことができるのではないかと考えた。

4 研究内容

仮説“基礎的・基本的な学力の定着”を実証するためには、授業の中で仮説に基づく具体的な事例を設定し、できるだけその事例に沿って授業を行うことが一番の近道だと考えた。そのため本校では授業を組み立て行っていく際に、研究主題に迫るための方法として、それぞれの教科、部会において共通してできるような4つの視点を設定し授業になるべく組み込むようにした。

以上のことから以下の4つの視点をできるだけ盛り込む授業を組み立て、実践していく。

①その授業（単元）における基礎基本の内容を明確化する

- ・その授業（単元）においてクリアすべき基礎基本の内容を明確化し、生徒に提示しそれを学習の目標に掲げることで、その目標達成のために意欲的に学習に取り組む姿勢を育てる。
- ・授業の最後に、ワークシートなどを使い、基礎基本の内容の理解度を確認させる活動を行う。

②繰り返し学習の工夫

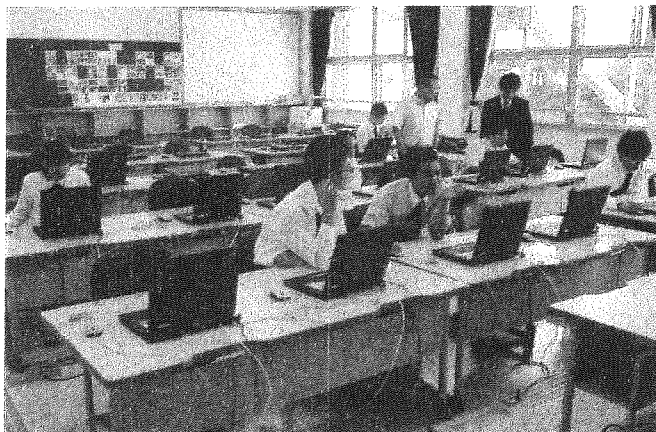
- ・家庭学習を推進し、家庭で復習を行う習慣をつける。
- ・授業の冒頭に前時の内容の復習を行うことで、前時の内容を改めて思い出させるだけでなく、前時の内容を根付かせ、本時の授業との関連をスムーズにする。
- ・重点内容を反復学習する場を設ける。

③個に応じた指導の工夫

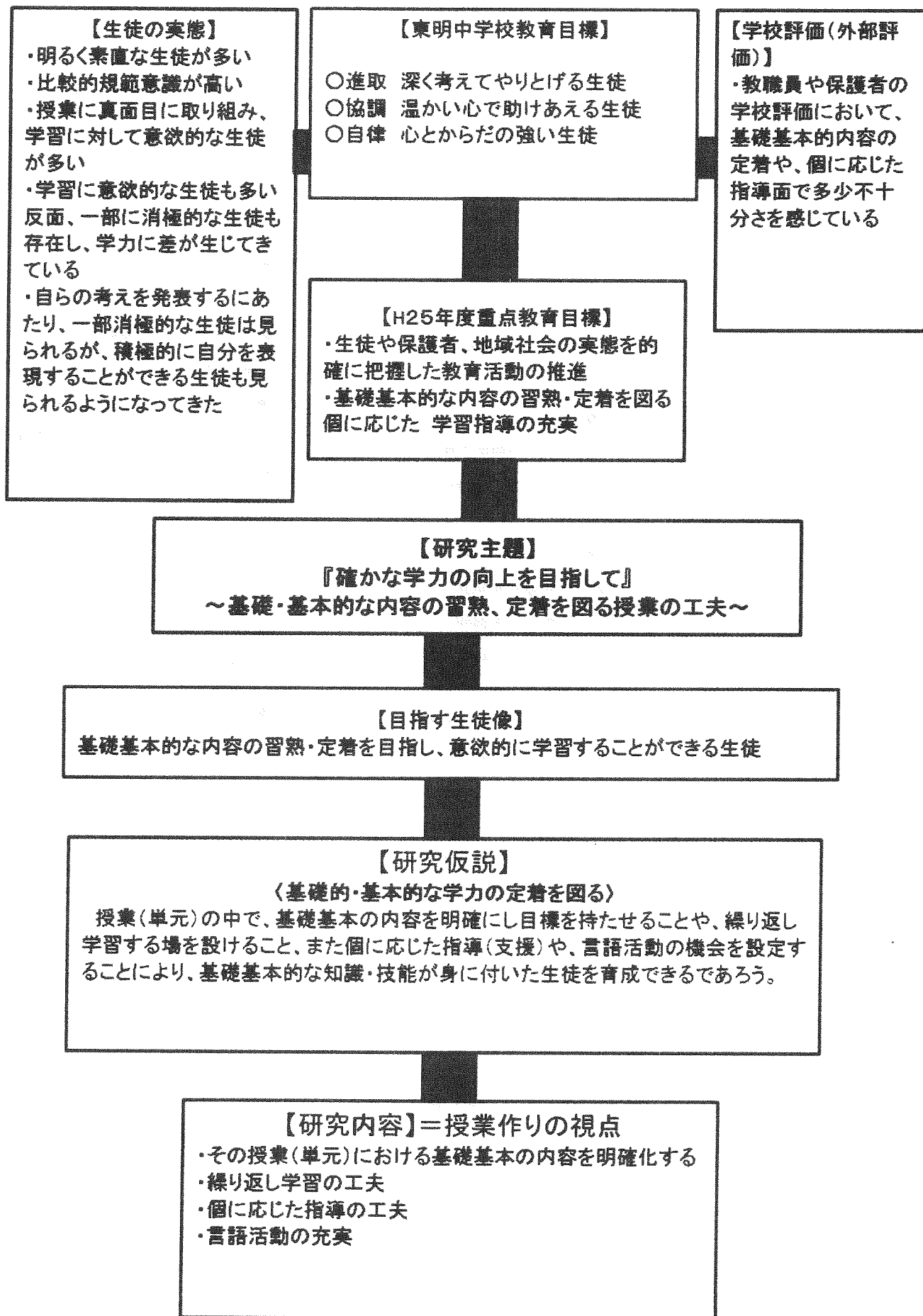
- ・個別指導やグループ別指導などの少人数指導による学習形態の工夫を行う。
- ・机間指導などを通し、学習内容の理解や習熟の程度に応じて指導（支援）を行う。
- ・ペア学習やグループ学習の場などを通し、生徒同士教え合える場面を設定することで、基礎基本の定着を図る。
- ・子どもの興味・関心に応じた課題に取り組む学習を取り入れる。

④言語活動の充実

- ・自分の考え、意見を持つ活動を設ける（思考力）
 - ・自分の意見を文字で表したり、他の生徒との意見交流などを行う（表現力）
 - ・自らの考えや他の生徒の考えを、集団の中で発展させたり深めたりするなど（判断力）
- 以上の視点を発展させるために、言語活動を充実させ、基礎基本的知識・技能の定着との相互作用を図る。



5、東明中学校 研究の全体構造図



6、研究の計画、実践の概要（3カ年）

1 学 期 ↓ 2 学 期 ↓ 3 学 期	■第1回全体研修（6/27） ・研究の概要、3年間の計画	□新年度計画会議 ・年間計画の提案	□5月職員会議（5/16） ・研究計画推進について提案と意見交流 ・指導案形式の確認 ・各教科部会、パイロット授業者以外の授業の確認
	■第2回全体研修（11/18） ・授業交流会に向けての指導案検討	■第1回全体研修（6/22） ・研究主題、研究仮説、研究内容の確認 ・各部会での授業者の決定 ・全体研修の日程と内容の詳細について ・指導案形式の確認	■研究授業・研究協議（6/18） ・芸体系 2年2組 音楽科 辻教諭
	■第3回全体研修（11/28） ◆研究授業研究協議 ・理系部会 理科担当 1年3組 窪田圭祐教諭 ・芸体部会 技術担当 1年1組 加賀靖朗教諭 ◆指導主事からの助言	□第2回全体研修に向けて（9/20） ・各自で研究主題を遂行する上での意識交流についての提案	■第1回全体研修（6/25） ・パイロットスクールに向けての提案
	□授業交流反省（12/20） ・授業の振り返り ・研修の進め方 ・研究主題、研究仮説、研究内容に対する意見交流 ↓ 交流意見を通して研究主題、仮説、内容の新たな構想を練り直し	■第2回全体研修（11/20） ・各部会での研究主題に対する意識交流 ・各部会での指導案検討	■研究授業・研究協議（8/28） ・特別支援系 ほほえみ学級 成田教諭
		■第3回全体研修（12/5） ◆研究授業研究協議 ・文系部会 英語担当 1年1組 桐敦子教諭 ・理系部会 数学担当 3年1組 鈴木誠教諭 ・芸体部会 家庭科担当 2年1組 桑村弘子教諭 ◆指導主事からの助言	■研究授業・研究協議（9/19） ・理系 2年2組 理科 塚田教諭
		□授業交流反省（12/20） ・授業の振り返り ・次年度、研修テーマのより定着を目指し、新たに提案	■研究授業・研究協議（10/2） ・文系 3年1組 社会 三村教諭
			■第2回全体研修（10月18日） ・全体発表会内容検討 ・パイロットスクール授業者の第1回指導案検討 ・パイロットスクールに向けて役割検討
			■第3回全体研修（11月7日） ・パイロットスクール当日の流れ検討 ・パイロットスクール授業者の第2回指導案検討→11月11日（月）締め切り
			◆【パイロットスクール公開研究会】 11/27(水)
			■第4回全体研修(2月) ・公開研究会の反省、次年度の方向性

7、実践資料（研究の視点を生かした指導案の一部）

①教科名 体育 1年 単元名「ダンス（現代的なリズムのダンス）」

②単元の目標 「リズムの特徴をとらえ、変化とまとまりを付けて、リズムに乗って自由に踊る」

③研究主題との関連

（1）基礎・基本的な内容の習熟を図るための繰り返し学習の工夫

現代的なリズムのダンスに対して、恥ずかしさや経験不足を感じる（63.1%）生徒も多いため、授業のウォーミングアップとして、映像を見ながら、みんなで同じ動き繰り返し練習する時間を設

定した。数種類の基本的なステップを経験、習得させることを基礎・基本として取り組ませる。

(2) 言語活動を充実させるための工夫

ダンスのステップや動きのアイデアなどをグループ内で自由に出し合い、意見交流が出来る時間を十分に確保する。仲間と教え合う場面では、ステップや隊形など動きの改善点について、理解しやすい言葉を用いたり、身体表現や図示を交えたりして自分の意見を伝えることができるように、必要に応じてリーダー的な生徒のサポートを行う。学年として練習場所を共有することで、お互いの練習方法や表現方法を意識させ、練習や発表方法の工夫につなげさせたい。

④本時の展開（指導課程）

時間	学習内容・生徒の学習活動（▽）と教師の支援（▲）	評価（■）・留意点（◇）
導入 11分	・集合、整列、挨拶、点呼 ・本時の学習内容の確認と課題の確認 ▽ウォーミングアップ（基礎ステップの練習）	◇授業前に IT 機材を準備 ◇ホワイトボードに本時の学習内容と課題を明示し、把握させる。 ・プロジェクターで投影
展開 35分	～今日の目標①～ グループで課題を確認し、練習の仕方や発表方法を工夫しよう。	
	▽1 発表会に向けたグループ練習 ▲部分練習や全体練習など、生徒の動きを確認する。必要に応じて、スムーズに練習が行えるように支援する。 ▲グループ練習、リハーサルの流れの確認	■グループで課題を確認し、練習の仕方や発表方法を工夫しているか。（思考判断） ◇グループ練習～リハーサル練習の交代指示
	～今日の目標②～ ステップや動き、隊列を工夫してまとまりのある作品づくりをしよう。	
	▽2 ステージを使用したプレ発表会 ▲撮影した映像を生徒自身が確認することで、動きや隊形など課題点を確認したり、意見交流や教え合ったりすることができるような時間と場所を確保する。	・練習内容をすぐ確認できるように、音響、ビデオ、モニターなどを事前に設置。 ◇生徒同士が互いに協力し、積極的に練習出来ているかなど、全体把握を心掛ける。
	▽3 修正練習 他のグループの練習などを参考にグループ内で交流しながら、課題を明らかにし、必要に応じてグループ練習を行う。 ▲リーダーを中心に、より豊かな表現が出来るように工夫させる。	◇「できた」と実感できるように反復練習の時間を十分に設ける。 ■動きや隊形づくり、表現方法を工夫しているか（技能表現）

ま と め 4 分	・集合、反省 ▽本時の学習の評価を行う。 - 学習カードの記入 ・次時の学習内容（発表会）について確認する。 ・挨拶、後片付け	◇次時につながる課題を発見させる。
-----------------------	---	-------------------

⑤本時の評価

- ・グループで課題を確認し、練習の仕方や発表方法を工夫することができる。（思考判断）
- ・ステップや動き、隊列を工夫してまとまりのある作品づくりをすることができる。（技能表現）

8、研究の成果と課題

《研究の成果》

〔教師の成果〕

- 研究主題を意識し授業を組み立てることにより、授業の幅を広げることができただけでなく、予想し得なかった生徒の反応が見られるなど、新しい発見を感じることができた。
- 異教科で授業交流を進めたことにより、自分では気付かない新しい授業視点で、改善の方策について話し合うことができた。
- 基礎学力の低い生徒に対して、今まで以上に配慮した授業を組み立てるようになった。

〔生徒の成果〕

- 研究内容を具体的に定め、意識的にその項目を授業に組み込んだことで、授業にメリハリができた。それにより生徒も授業に対する集中力だけでなく、授業に寄せる積極的な姿勢も高まった。
- 昨年度行われた3年生対象の全国学力テスト（国語、数学）において、全ての教科において全国平均を大きく上回った。また今年度行われた全国学力テストにおいては、数学の知識の分野でわずかに全国平均を下回ったが、その他は全国平均を大きく上回った結果からも、東明中学校の生徒の学力が着実に向上している。

《研究の課題》

- 基礎基本の定着ばかりに固執すると、どうしても進度が遅くなるだけでなく、学力の高い生徒が手持無沙汰になってしまう傾向にある。スムーズに授業を進め、学力の低い生徒と高い生徒両方が同時に積極的に参加し、能力を伸ばすことができる授業作りがより必要である。

《今後に向けて》

3カ年計画としてこの主題を設定し、今年最終年を迎えた。基礎基本的な学習の定着に重点を置き授業を進めることで、たくさんの成果を得られた反面、新たな課題も浮き彫りとなった。その中で次年度からは・・・

- 生徒の学力差を把握した上で、全ての生徒が意欲的に授業に臨み、より学力を向上させることのできる授業の工夫と方策を図る。
- スムーズに授業を進めながらも、「思考力」「表現力」「判断力」の場を積極的に授業に取り入れ、より言語活動の充実化を図る。

これらのことを課題としてとらえ、さらに研究を推進していきたいと考えている。

室蘭市では「21世紀を切り拓く心豊かで主体的に学びつづける人づくり（本市教育推進の目標）」の具体的化を推進するために、平成23年度より学力向上基本計画を策定いたしました。確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた教育活動を推進し、「生きる力」を育む教育の実現に向けて、市内教育関係者が一丸となって取り組みました。

室蘭市教育研究所も学力向上基本計画に基づき、「授業改善」や「研修体制の確立・充実」、「学習・生活習慣の改善」に焦点をあて、「基礎・基本を身に付け、主体的に学習に取り組む児童生徒の育成」を研究主題に、サブテーマを「わかる喜びを味わわせる学習指導の工夫」とし、3カ年計画による実践・研究を推進いたしました。

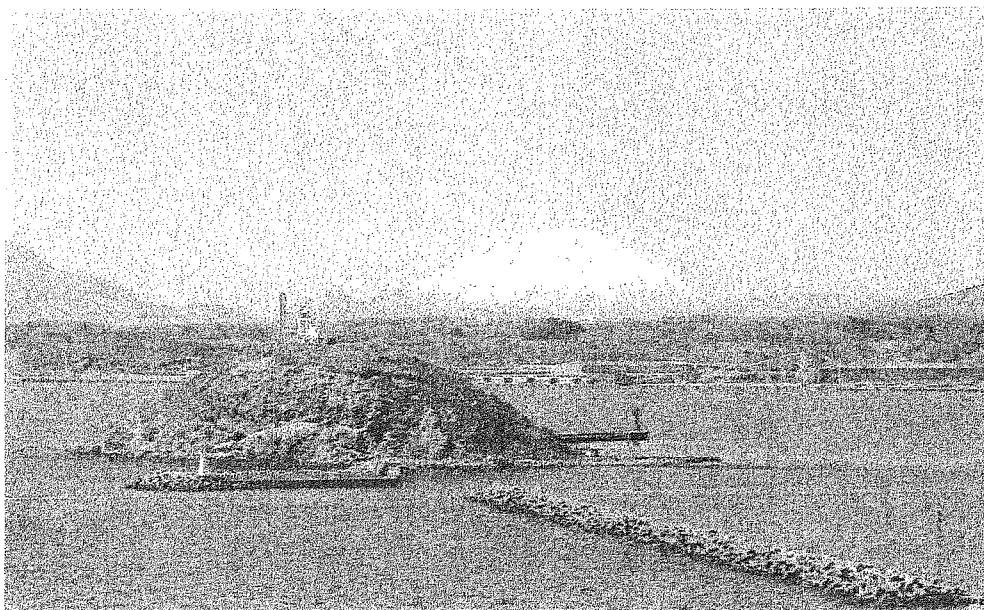
研究部による仮説検証授業の開催をはじめ、事業部による各種研修講座の開催、調査部による家庭向けのリーフレットの作成・活用など、3つの部が室蘭の教育の改善と充実に向けた取組を行いました。

本紀要は、3カ年計画の最終年のまとめとして発刊するものであり、ぜひ一読いただき、室蘭市の子ども達の確かな学力の向上のため、ご意見等をいただけると幸いです。

最後に、公開研究会、研修講座等の講師や会場校としてご協力いただきました皆様をはじめ、研究所にご支援ご協力いただきました教育関係各位に心より感謝申し上げます。

室蘭市教育研究所

副所長 小林 俊 文



(「大黒島」遠景)

研究紀要 第48号

「基礎・基本を身に付け、主体的に
学習に取り組む児童生徒の育成」

発行 平成26年3月14日

発行所 室蘭市教育研究所

〒050-0073 室蘭市宮の森町3-1-2

TEL (0143) 45-8620

FAX (0143) 43-5149

発行者 所長 高見 恭介

製本所 株式会社日光印刷